

ゆきのまち
理想
文学賞
応募
作品集



01目次＋作品紹介

01 まえがき＋目次

短編公募のなかで『ゆきのまち幻想文学賞』は、ひとつの輝きを放っています。

デビューに繋がるわけでもなく、賞金が高いわけでもなく、それでも毎年数百～千通もの作品が集まる公募を、他に知りません。

それだけ、テーマである「雪が持つ幻想性」に引かれる創作者が多いのでしょう。

ブログやメルマガで「この人気公募の応募作品集を作りませんか」と声をかけたところ、予備選考通過3作品を含む、8人11作品ものご協力を得ることができました。望外の喜びであり、ご協力いただいた皆様には感謝です。

忘れていけないのは、素敵な表紙を書いてくださった常夏さわやさんです。

全ての作品に目を通していただき、そこからイメージを膨らませて、アンソロジーの世界観をみごとに一枚の絵に凝縮してくれました。奥行きのある町並みを楽しんでいただければと思います。

それでは、目次を兼ねての作品紹介です！

【目次＋自作紹介】

02 いとうりん 『さいごの風景』（予備選考通過作品）〔HP：[リンのショートストーリー](#)〕

親が高齢になったこの頃、「死」というものを穏やかに優しく書きたいと思うようになりました。「死」は決して悲しいものではないという希望をこめて書いたお話です。雪の真夜中、静かに静かに旅立つ情景を思い浮かべていただけたら何より嬉しいです。

私はいつも読みやすさを重視して書いています。だから文章が平坦で薄っぺらな印象を持たれないかと心配です。

それでも、今回は最後まで楽しく書けたので、それが一番かなと思います。

03 蒼隼大 『雪の声』（予備選考通過作品）

とある事情で小説を書こうと思い至り、某所で1200字の掌編ばかり書き散らしていた私が初の応募作品として書いた、初の十枚の作品がこれでした。処女作です。「ワタシ、初めての……」です。

予備選考を通過したものの、残念ながら落選。選評では『説明的すぎる』『全体的にぎこちない。書き慣れていない印象』と評され「そりゃそうだ」と思ったものです。

04 蒼隼大 『鬼瀬山』

ホラーとは幻想文学のサブジャンルの一つである……ならば『ゆきのまち』においてガチのホラーは受け入れられるのか？ とチャレンジしてみた作品。ちょっと針が振り切れちゃってスプラッタ方面に走った結果、惨敗の憂き目に。当たり前だ。

「審査員を試すのは良くない」という教訓を得たものの、後にガチの濡れ場がある作品をライトノベルの賞に送ってみる懲りない私でした。（三次選考は通過したんだけどなあ）

05 藤森ひろ 『雪解けをあなたと』（予備選考通過作品）

遠い過去の殿様が雪を依り代に現われ、破れた恋に目を背けている主人公と交流する話です。古い品が今に残っているのは、それを受け継ぎ守ってきた人々の思いがあつてこそだと感じたことからイメージが湧きました。

作中で経過する時間が長すぎ、十分に二人の心情を表現できなかったのが心残りです。雪の幻想性の辻褃も合っていませんが、どこか惚けた、淡い恋に心残りのあるお殿様にクスリとして頂ければ幸いです。

06 藤森ひろ 『轍（てつ）を繋ぐ雪』 [HP:[北の国から咲く文](#)]

雪の夜を走る列車にて、亡き祖父に会う話です。蒸気機関車の運転士だった祖父の生涯と、日本で最後のSL営業運転は雪国・北海道であったことにイメージを得ました。蒸気機関車については実際にラストランに使用された物を調べた範囲の表現としています。

「銀河鉄道之夜」の足元に及ぶべくもありませんが、汽笛の響きや機関車の雰囲気がいずれも伝わったら嬉しいです。

07 田村悠記 『雪海』

写真のなかにだけ現れる雪、というイメージが、本作のアイデアの出発点でした。そこから、雪が現れる条件、雪が現れる理由を逆算的に考えていったら、自然とひとつのお話になりました。「雪海」というのは作中の登場人物の名前です。雪と海、って、なんか綺麗な組み合わせだと思います。

雪や海が暖かいものに思えるような気持ちを書ければと考えて、書きました。お読みいただければ幸いです。

08 田村悠記 『伝言』

雪降る景色って、ことさら、静けさを感じます。そこに音があるとしたら、ふつうの人には聞こえない特別な、降雪の音というものがあるとしたら、どんなだろう。という着想から本作を書きました。

悲劇的な要素を含みますが、悲しいだけの読後感にならないように配慮しました。タイトルに反して、わかりにくいお話だと思います。伝わりにくいお話だと思います。ですが、お読みいただければ、なにかが伝われば、幸いです。

09 川越敏司 『初雪が降る前に』

これは、はじめモーパッサンの短編「初雪」を読んでインスピレーションを受けた作品です。登場人物がフランス系なのはそのためです。

書き始めると、すぐに冒頭のシーンが浮かび、お話が（自分では）次第にジャック・フィニイの『盗まれた街』のような感じになっていきました。自分ひとりだけが真相に気づいている。その恐怖感を描こうとしました。

10 齊藤想 『冬の葬列』 [HP：[サイトーブログ](#)]

本作は司馬遼太郎『城塞』の1シーンから着想を得ています。豊臣秀吉の側室のひとりであった加賀殿が故郷に帰るのですが、行列は豪華なのに、主人が無官であるために「下にい〜」というお馴染みの光景はありません。この物悲しさが、作品の背景です。

空想ではありますが、時代物ですので、行列の出発時期、主人公の出身地等、歴史的事実と矛盾しないように気を配りました。少しでもお楽しみいただけたら光栄です。

11 朝羽岬 『夜明けの雪遊び』 [HP：[とらねこの執務室](#)]

このお話は、ゆきのまち幻想文学賞に初めて挑戦する作品です。ですから、なるべく明るく終わるお話にしたい、と思いました。タイトルにもなっている夜明け、治癒、春の訪れ。それらを落ち着いた感じでまとまるよう、女性目線からの語り口で描きました。

少し不思議な春の予感を楽しんでもいただけたら、と思います。別れ際の景色を美しい、と感じていただければ嬉しいです。

12 佐藤いふみ 『雪幻の恋人』 [HP：[コミケで同人誌100部売りたい](#)]

「画家の夢を叶えたいが効率の悪いバイトはしたくない——無職の稔は大企業への再就職を選ぶ。しかし社会は甘くなかった。雪の街に現れた恋人の幻は稔をどこへ導くか」

ゆきのまち幻想文学賞のテーマに真摯に答えることと、原稿用紙10枚でドラマを作るには各必要要素にどの程度ずつ分量を割り当てれば良いかの二つの課題に取り組みました

表紙絵担当：常夏さわや [HP：[ぽっけ](#)]

私が雪を知ったのは、2年前に東日本に引っ越してきてからです。勢いよく降ってきて前進を阻む雪。瞬く間に世界を幻想的に塗り替えてしまう。不安と好奇心を感じずにいられません。

今回のアンソロジーに死者が登場する作品が多かったことから、雪の街にヒロインがポツカリ浮き出るような絵にしようと思いました。

迫るような建物と暗い色で不安感を出し彼女は明るい感じにしてその差で彼女と世界を分けました。

02いとうりん『さいごの風景』（予備選考通過作品）

控えめに扉を叩く音が聞こえた。他の音は何もない静かな冬の夜。綾さんは壁の時計で時間を確かめて、よいしょと立ち上がった。

扉を開けると、尖った三日月みたいな冷たい空気が袖を揺らした。

黒いタキシードを着た美しい青年がゆっくりとお辞儀をした。

「お迎えに上がりました」

「時間ぴったりね」

綾さんは「おお寒い」と腕をさすって、戸口にかかったコートを羽織った。

「お着物を着たかったけど、この雪でしょう。諦めてお洋服にしたわ。どうして今日なのかしらね、春まで待てなかったのかしらね」

外へ出ると、ぼんやりとした月の光が積もった雪を頼りなく照らしている。青白い夜だ。

「旅立ちにふさわしいわね」綾さんは誰にともなく呟いて、最期に長年暮らした我が家を振り返った。煉瓦の壁のヒビにさえ、思い出が詰まっている。

美青年は、タキシードにはおよそ似合わない古くさい提灯をかざして「足元お気を付け下さい」と丁寧と言った。

「あなた、そんな薄着で寒くないの？」

綾さんの問いかけに美青年は、いくらか首を傾けて言った。

「ご心配なく。私は人間ではありませんから」

彼は死神だ。綾さんを迎えに来た。

ひとり暮らしの綾さんが困らないように、エスコートするのが彼の仕事だ。青い月に照らされたその顔は、ため息が出るほど美しい。

「あなたハンサムね。わたしがあと五十歳若かったらお似合いのカップルね。あら、こんなこと言ったら主人に怒られるかしら」

美青年は笑うでもなく口元を少しだけ緩めた。

「どこまで歩くの？」

「申し訳ございません。この先の通りに車を待たせてあります。この雪では、タイヤが埋まってしまいますので」

「だから春まで待てばよかったのよ。雪が溶けたらじきに桜も咲くのよ」

「ご希望にそえずに残念です。日にちは変えられませんので」

「わかってるわ」と不機嫌なそぶりを見せながらも、綾さんはまんざらでもない気分だった。たとえ死神でも、こんな若い男と深夜の雪道を歩くことなど綾さんの日常ではありえない。しかも、こんな深い雪道を歩いているのに、ちっとも足が重くない。まるで少女の頃のように軽やかに歩けた。生きていれば誰もが感じる痛みや苦しみは、こんな風に消えていくのかと、綾さんは思った。

「通りに出たら郵便局に寄って下さる？ 娘に手紙を書いたのよ」

ひとり娘の瑩子は、雪のない街で暮らしている。結婚して二人の子供がいる。最近はめったに帰ってこないが、綾さんのことをいつも気にかけている優しい娘だ。

「一緒に暮らそうって言ってくれたのよ。でもね、主人と暮らしたあの家を離れたくなかったの。本当はね、雪は嫌いな。都会生まれなのよ、わたし」

「存じております」

「主人との結婚を両親に反対されてね、駆け落ちみたいにこの町に来たの。だからね、死ぬまでここにしようと決めたのよ。もっとも私を雪国に連れてきた主人が、先に逝ってしまったけどね」

「じきに会えますよ」

「あら。そうなの？それならやっぱりお着物を着たかったわ。本当に春ならよかったのに」

美青年は、ただ頭を静かに傾けて歩き続けた。

頼りない灯りがちらちら見え始めた。まるで誰かが置き忘れたようにひっそりと、バス停が立っていた。ようやく通りに出たのだ。

通りと言っても何も無い。ぽつりぽつりと民家があるが、眠ったように息をひそめている。

郵便局まで行って、綾さんは切手を貼り忘れたことに気づいた。

「あら、これじゃ手紙は出せないわ」

がっかりしながら白い封筒を見つめる綾さんに、美青年は静かに言った。

「あちらから出すことも出来ますよ」

「あちら？天国から？」

綾さんは、それも面白いと頬を緩めた。

手紙と言っても、たいしたことは書いていない。「ありがとう」の言葉と、幸せだったということを手短かに綴った。財産などの細かいことは、信頼できる友人に託した。もっとも財産と言っても、わずかな貯金と大切にしていた着物と、あの家だけだ。

思い出が染みついたあの家は、もう誰も住まないだろう。綾さんは、それでもいいと思う。雪の中でひっそりと忘れ去られるのを、家が望んでいるように思えた。

ふと気が付くと、すぐ隣に黒い車が停まっていた。闇に紛れてしまいそうな、ぼんやりした黒だ。

美青年が後部座席のドアを丁寧に開け、どうぞと一礼した。綾さんは満足そうに車に乗り込んだ。運転席には、顔があるのかないのかわからないほど帽子を目深に被った男が座っていた。手袋だけが白い。

「どちらまで？」と地面を這うような声で言い、微かに後ろを振り返った。

「どちらって？天国に行くんじゃないの？わたし、地獄へ行くようなことはしていないわ」

綾さんは、隣に座った美青年にすがるように尋ねた。

「ご心配なく。最期に見たい風景まで、お連れすることになっております」

美青年の声は相変わらず抑揚がないが、不思議と綾さんを安心させた。

「そういうことならわたし、あの土手に行きたいわ。春になると桜が満開になるの。桜吹雪の下で、よくピクニックをしたのよ」

土手で綾さんが作った弁当を広げ、行儀が悪いと思いながらも子供の歌を歌いながら食べた。まだ幼い瑩子が、蝶々のような小さな手で舞い落ちる桜の花びらを追いかけた。

幸せな日々はたくさんあったけど、夢にまで見るのはいつでもこの風景だ。

「かしこまりました。では、参りましょう」

美青年は運転手に行先を告げた。綾さんにはわからない言葉だった。

車が静かに動き出した。

綾さんは、手のひらで曇ったガラスを拭った。雪で真っ白な町が遠ざかって行く。頬を熱いものが伝って、泣いていることに気づいた。すっかり枯れたと思っていたのに、涙がまだ残っていたのかと、綾さんは少し驚いた。

「少し眠りましょう」

美青年がそう言って、綾さんのまぶたに冷たい手を乗せた。赤ん坊がぴたりと泣き止むように、綾さんは眠った。

柔らかい風が吹いている。

草の中に隠れるように小さな堇が咲いている。

綾さんは、ゆっくりと目を覚ます。草の香りを吸い込むと、懐かしそうに目を細めた。

雪のようにちらちら舞っているのは、桜の花びらだ。綾さんは振り返り、満開の桜並木に向かって少女のように両手を広げた。

花びらが綾さんの袂に集まる。そこで初めて、着物を着ていることに気づく。綾さんが大好きな浅黄色の着物だ。

「誰かが着物を着せてくれたのかしら」と声に出して辺りを見回し、美青年がいないことに気づいた。眠っている間に置いて行かれたのかと、綾さんは戸惑っている。

さて、そろそろ私の出番だ。

草の上にそろりと足を乗せて、綾さんに向かって歩き始めた。浅黄色の美しい立ち姿に見とれながら私は歩いた。

綾さんの目が、私を捉えた。

「あなた…？」

「美青年でなくて悪いね」

綾さんは、泣き出す一歩手前のような顔で笑った。

「ここから私がエスコートしますよ。綾さん」

「いやねえ。そんな気取った言い方、変よ」

綾さんは、笑いながら私の胸を軽く叩いた。

「やっと会えたね。待ちくたびれたよ」

「あなたがいなくなってから十年間、充分楽しませてもらったわ」

「よほど楽しかったんだろう。笑い皺が増えているよ」

私が顔を覗き込むと綾さんは「いやな人ね」と両手で頬を抑えた。再会はあまりにも自然だった。まるで昔のままだ。

「あなたに会ったら話したいことが山ほどあったのに、忘れちゃったわ」

「ゆっくり思い出せばいいさ」

私は綾さんの手を取った。そして、まるで永遠を楽しむようにゆっくりと、桜吹雪の中を歩き

始めた。

「おばあちゃん、笑ってるみたい」と娘たちが言い、瑩子は棺に永眠^{ねむ}る母を見た。浅黄色の着物を着せたのは、それが母に一番似合っていたからだ。

「きっとおじいちゃんと会っているのよ。ふたりで桜並木を歩いているんだわ」

「桜？咲いてないよ。まだ冬だもん」

瑩子は、くすつと笑いながら、今朝届いた母からの手紙を胸に抱いた。

『瑩子へ…ありがとう。楽しい人生だったわ。とても幸せだった。だから悲しまないで。あなたの幸せを祈ります。母より』

切手のない封筒から、そんな短い手紙と一緒に、桜の花びらが舞い降りた。

外は雪が降っている。母の葬儀がすっかり終わっても、相変わらず雪は降り続いていた。すべての風景を真っ白に染めて降り続く。

この景色に、もう父も母もいないのだと思うと、瑩子はやはり寂しかった。

「桜の頃にまた来るわ」

空に向けた瑩子のつぶやきを、雪だけが聞いていた。

(了)

ふと目を覚ますと、隣に眠っていた筈の彼がいなくなっていた。部屋の明かりは煌々と点いたままで、少し喉がいがらっぽいのはこちらも点けっぱなしだった暖房のせいだろう。

体を起こすと、Tシャツとトランクス姿の彼が窓際に立っていた。少しだけカーテンをめくって窓の外を見つめる、その眼差しが何故だかとても厳しくてなんとなく声をかけ辛い雰囲気だ。

「ごめん、起こしちゃったかな？」

ぼんやりと見つめる私の視線に気付いたのだろう。そう言いながら彼はどことなくぎこちない笑みを浮かべた。

「ううん」

答えながら毛布を引き寄せ、私は下着姿の体をクルリと包み込んだ。つい先刻まで全裸で抱き合っておいて何を今更と思わなくもないのだが、どういうわけかひとたび行為が終わってしまえば下着姿を見られることですら妙に気恥ずかしくなるものだ。

「……今更隠しても仕方ないと思うけど？」

「いいの！ 恥ずかしいんだから。……で、何見てたの？」

彼は再び視線を窓の外に向けた。

「雪だよ」

私は毛布をズリズリと引きずりながら彼の傍まで近づいて行った。カーテンの端を掴む腕の下から頭を差し込んで窓の外を見ると、立ち並ぶ家々の屋根がぼんやりと銀色の光を放っているように見えた。視線を移せば街灯に照らされた路上のアスファルトも、確かに白い雪に覆い尽くされている。

「ホントだ……いつの間に降り出したんだろうね。道理で静かだと思ったよ」

深夜なので静かなのは当たり前なのだが、雪の夜の静けさというものにはちょっと独特の雰囲気がある。そこにはある種の荘厳さすら感じられる気がして、だから私は雪の夜が嫌いではない。しかし今日に限ってはちょっと困ったことになったな、とも思っていた。何故なら今日は、買ったばかりのブーツを履いてきているのだ。明日の朝、溶けかけた雪の中を歩いて帰らねばならないと思うと少しばかり気が重くなってくる。

そんなことを考えていると突然、彼が乱暴にカーテンを閉じてゴソゴソとベッドに潜り込んでしまった。何か、気分を害するようなことをしてしまったのだろうか？

「……どうしたの？」

「別に」

不機嫌な声で答える彼の後を追おうとして、喉が渴いていることを思い出した。

「ねえ、何か飲み物貰ってもいいかな？」

「ああ、勝手にどうぞ」

一人暮らし用の小さな冷蔵庫には、様々な食品が整然と並んでいた。自炊をしているとは聞いていたが、この分では結構本格的にやっているようだ。普段は男らしく振るまっている彼の意外な一面を微笑ましく思いながら、1.5リットルの炭酸飲料をコップに注いでいると

「冷凍庫、開けてみな」

と、布団の中からくぐもった声が聞こえてきた。

言われたとおりに冷凍庫を開けると、こちらもしっかりと整頓されている冷凍食品の奥に、真っ白に凍り付いたインスタントコーヒーのビンが鎮座しているのが見えた。一度冷凍食品を除けてからビンを取り出すと、何やら底の方に薄汚れた氷のようなものが凝り固まっているのが見える。

「何これ？ 氷？」

「雪だよ」

ベッドからゴソゴソと這い出してきた彼はそう言ったが、ふわふわ感の失われたその物体はどう見ても薄汚れた氷にしか見えない。

「さっきお前も言ってたけどさ、雪の日って妙に静かだろ？」

「うん、雪が防音材の代わりになるんだよね、確か」

「じゃあ、雪に吸収された音は何処に行くと思う？」

何処って……答えに詰まっていると、彼は私の手からそっとビンを取り上げて、手のひらでビンにへばりついた霜を拭った。おかげで少しは中がはっきりと見えるようになったが、私にはやはりただの氷にしか見えない。

「雪は溶けて無くなるまで、吸収した音をその中に留めこんでいるのさ。だから雪が溶けるときに耳を澄ましていると、解き放たれた音が聞こえてくることがある」

「本当に？」

「さあね……とにかく、俺は母さんからそう聞いた。その母さんは小さい頃に死んだ……いや、殺されたんだけどね」

「え？」

驚きのあまり、言葉を失った。早くに母親を亡くしたとは聞いていたのだが、殺されたというのは初耳だ。見上げればじっとビンを見つめる彼の眼差しはひどく冷めていて、そこからはいかなる感情を読みとることもできない。

「あの日、雪の積もった路地裏で俺は母さんの絞殺死体を見つけた。犯人は捕まっていないから、金銭目的だったのか乱暴目的だったのか、それとも他に理由があったのはわからないままだ。お気に入りのマフラーが首にギュッと食い込んで、ドス黒く膨れあがった顔から血走った眼球が飛び出しかけてたよ」

幼い頃に目の当たりにした、母親のそんな無惨な姿は彼の心にどれほど深い傷を残しているのだろう……それを思うと、胸の奥にキリリと痛みが走った。

「その時、俺は何より先にこのビンを取るために家に駆け戻った。そして、もう冷たくなっていた母さんの周りの雪を夢中で集めたんだ。何故かって？ その雪の中に母さんの最期の声が残っているかもしれないと思ったからね……もしかしたら、犯人が分かるかもしれないとも思ったのかもな。とにかく泣きじゃくりながら必死に雪を掻き集めた記憶はあるけど、その後のことはあんまり覚えてない。ただ周りの大人達がバタバタと忙しそうにしていたような記憶はあるけどね。

「それから、父さん一人の手では面倒が見られないということで俺は親戚の家に預けられた。普

段から家族ぐるみの付き合いがあった家だから、ドラマみたいに虐められたりはしなかったけど、それでも俺にだけ『母親』がいないことを寂しく思うことが時々あった。そんな時にこのビンの中の雪を少しだけ溶かして、母さんの声を聞こうとしたんだけど……もう、これだけしか残ってなかったのか」

「……それで、お母さんの声を聞くことはできたの？」

私の問いかけに、彼は肩をすくめた。「まさか、そんなわけないだろ？　それでもなんとか声を聞こうとして色々試している間だけは、寂しさを忘れることができたから無駄にはならなかったけどな」

彼は手の中のビンを弄びながら再び窓際まで歩いていった。そして、カラカラとサッシを開けたかと思うと、いきなり大きく振りかぶる。

「ちょっと、まっ……！」

私の制止は間に合わなかった。慌てて窓に駆け寄っても、すでに闇の中へと投擲されてしまったビンの行方はもう分からない。ただ『ガシャン』という破碎音だけが妙に遠くから聞こえてきただけだった。

その行為の意味が理解できず、身を切るような冷たい風に晒されながらただ呆然と立ち竦む私の肩を、彼がそっと抱いてくれた。その手はとても暖かい、けれど……

「いいんだよ。あれはもう必要ないんだ」

「どうしてよ！　例え何も聞こえてこなかったとしても、あれは大事なお母さんの形見だったんじゃないの？」

思わず声を荒げながら見上げると、真っ直ぐに私を見つめ返す彼の顔にはどこまでも優しい笑みが浮かんでいた。

「だって、今はお前がいるじゃないか。俺はもう、寂しくなんかないんだよ」

その言葉を聞いた瞬間、彼を愛していたつもりの私が、実は何一つ理解してなどいなかったということを思い知らされた。彼がどんなに大きな孤独を心に抱えながら生きてきたのかも、どれほど強く私を思ってくれているのかも……自分の愚かさに対する打ちのめされそうな悔しさと、彼の深い愛情に対する限りない感謝の気持ちが入り混じった不思議な感情が胸の奥からこみ上げてきて、私はとめどなく溢れ出す涙をどうしても抑えることができなかった。彼に抱きしめられながら、私はいつまでも泣き続けた。

翌朝、私は満ち足りた気分で彼の部屋を後にした。いつもなら辛くて仕方がない別れの時だが、お互いを結ぶ強い思いを知った今なら少しも寂しくなどはない。

溶けかけた雪に照り返す朝日の眩しさでよくは見えないが、恐らくは窓から見送ってくれている……あるいは、新しいブーツの汚れを気にしておっかなびっくり歩く私の姿を眺めながら、ニヤニヤ笑っているかもしれない彼に手を振って私は歩き出した。

「……………」

その時、不意に聞こえてきた女性の声に私は足を止めた。気のせいではない。それは遠い過去から響いてくるような、愛しげに彼の名を呼ぶとても優しい声……

振り返ってみても、思ったとおりそこには誰もいない。ただ、溶けかけた雪の中から顔を出

した、鋭いガラスビンの破片が朝日を浴びてキラキラと輝いているだけだった。

（了）

「雪の降る日にゃア、鬼瀨山に入っちゃなんねえぞィ」

冬になると始まる、婆ちゃんの口癖を僕は適当に頷きながら聞き流す。

「あの山に積もった雪ア、白い鬼になって人を喰らうからのウ」

鬼だって？ バッカじゃねーの？

婆ちゃんのことは好きだったが、この村のことは大嫌いだった。きっと両親が事故死なんてしなければ、ここで暮らす事など考えもしなかっただろう。肥やし臭い空気、チャンネルが四つしかないTV、通学に一時間以上掛かる中学校、ダサすぎる同級生たち。そして、訳の分からない風習や言い伝え……何一つとして馴染めない僕は早く都会に戻りたくて仕方がないのだが、中学を卒業してもまだ高校が控えている。あと五年。とてもじゃないが、そんな長い期間を耐えることなどできそうもない。だったらいっそ、全寮制の私学にでも進学してやろう……そう考えた僕は、ターゲットを絞ってひたすら勉学に打ち込んだ。空いた時間を図書室に入り浸るようになった僕は、そこでサヤカと知り合ったのだ。

一学年上の彼女はこの村の住人にしては珍しく垢抜けていて、どこか都会的な匂いを漂わせていた。将来は大学で民俗学を専攻したいという彼女の考えはこの古臭い村ではなかなか理解されず、サヤカは僕と同じく周りから浮いた存在となっていた。似たような孤独と夢を共有する僕たちは、いつの間にか次第に惹かれ合うようになっていった。

「マレビト、かしらね」

いつもの図書室。僕の語った白い鬼の話に、サヤカは首を傾げた。

「マレビト？」

「うん。異世界から来て、幸福や災厄をもたらす者……異邦人のことよ」

なるほど。つまりは僕と同類ってことだな……もっとも、こっちはこの村に何一つもたらしけないけど。

「知ってる？ 鬼瀨山に古い塚があるって」

「塚？ それって、もしかしてそのマレビトとやらの墓とか？」

サヤカは頷いた。

「かつて、日本の村という共同体がもっと排他的だった頃、『外』から来るマレビトが災いを運んでくるとされ、村人たちに惨殺された……そんな話はどこにでもあるわ。もし、この村に同じような過去があるとすれば……人々の罪悪感と恐怖が、白い鬼の伝説を生み出したのかも……」

今よりも排他的なんて想像を絶するが、だけどそれでは入山を禁忌とする日が雪の日に限定されている事の説明がつかない。忌むべき記憶を封印しようとするのなら、禁足地として常時立ち入り禁止とする方が自然というものだ。『山』と呼ばれてはいるものの、鬼瀨山は丘に毛の生えたような低山に過ぎないのだ。まさか遭難の危険があるから……などというつまらない理由でもないだろう。

「事件があったのが雪の日で、雪を見ると忌まわしい記憶が蘇る……とか？」

そんな苦しい説明は、しかし彼女自身でさえも納得させることができなかったようだ。

十二月に入ったある日、僕はサヤカを鬼瀬山に誘ってみた。いかにも雪の降りそうな、どんよりと濁った雲が空を覆っている、そんな日だった。

興味があるくせに難色を示し、渋っていた彼女も結局は「民俗学志望がフィールドワークを嫌がってどうするんだよ」という僕の正論と、抑え切れない好奇心には抗うことができなかったようだ。僕たちは学校をサボって待ち合わせ、人目に付きにくいルートを通して鬼瀬山を目指した。

予想通り、登山口に着く頃には粉雪がチラつき始めた。風も凍えるほど冷たかったが、登り始めるとすぐに体も温まってきた。二、三十分ほど山道を歩くと、すぐに頂上が見えてくる。次第に大きくなる雪の粒に怯えの色を見せ始めるサヤカを励まし、肩や頭に積もうとする雪を払い落としているうちに、僕たちは目的地へとたどり着いた。

サヤカの言った通り、少し開けた頂上には苔むした塚があった。塚といってもただの古びた石塔にすぎず、特に何かの文字が刻まれているわけでもない。これでは謎を解く鍵にはならないだろう。拍子抜けした僕はその辺に転がっている岩に座り込み、熱心に塚を観察するサヤカの姿をぼんやりと眺めていた。

「マレビト、ねえ……」

この塚に眠るのが本当に異邦人であったとして……理不尽に命を奪われ、見知らぬ土地に骨を埋めなければならなくなった彼らの事を思うと、自分の境遇がダブってなんだか暗澹たる気持ちになってきた。この辺りは人の心を不穏にさせる、瘴気じみた空気に満たされているんじゃないのか……そんな妄想じみた考えを苦笑と共に振り払いながらふと気付くと、いつの間にか辺りは真っ白に染まりかけていた。僕は「そろそろ降りよう」とサヤカを促した。

彼女はまた色々と調べたそうだったが、周囲の状態に気付くと素直に従った。

山を降り始めると、雪はますますその勢いを増してきた。まだ本格的に降り出すような季節ではないにも関わらず、気がつけば足首の辺りまで埋もれかけている。足を取られぬよう慎重に歩き続けるのは思いのほか体力を消耗し、僕はともかくサヤカはかなり辛そうだった。まだ日暮れまで時間があることもあって、僕たちは山道の途中に見かけた納屋で雨宿りならぬ、雪宿りをすることに決めた。

「まさか、こんなに降るなんてね」

薄暗く、埃っぽい納屋の床に座り込んで僕はため息をついた。見れば、サヤカは壁際で膝を抱えながらガタガタと震えている。

「寒いのか？」

僕の問いに、サヤカはふるふると濡れた黒髪を揺らした。

「この雪……きっと……祟りなんだわ……だって、まだこんなに降るはずは……きっと……白い鬼が来るのよ……」

「バカ言うなよ！」

僕が怒鳴ると、まるでうなされていたかのように呟いていたサヤカはビクッと肩を震わせた。そんな彼女の姿に、僕は失望を禁じえなかった。所詮、彼女もくだらない迷信に生きるこの村の

住人でしかなかったのか……

「そんな伝説、デタラメに決まってるだろ！ この雪だって、ただの……」

ザクッ！

雪を踏みしめる音に、僕たちははっと息を呑んだ。怯えるサヤカの顔からみるみる血の気が引いていく。何かが、すぐ外にいる……薄い壁を通して、僕はただならぬ気配を感じた。村の人間か？ いや、迷信深い奴らがこんな日にここまで登って来るはずはない。おまけに、この山には熊もいないはずだ。

「ちょっと見てくる」

念のため、壁に掛けてあった鉈を手を取った。天候はほとんど吹雪と呼べるほど荒れていて、視界は最悪。手の中の、ズシリとした重みだけを頼りにして、僕は再び雪の中へと踏み出した。とりあえず小屋の周りをグルリと回ってみたが、納屋の周りには誰かが、あるいは何かがいたような痕跡は見当たらなかった。

「なんだ……気のせいだよ」

拍子抜けした僕は、念のために少し離れた場所も見回ることにした。

それが、最悪の選択だった。

風に乗って聞こえてきたのは、くぐもったサヤカの悲鳴。はっとした僕は踵を返し、全速力で駆け出した……やはり、離れるべきではなかったと後悔しながら。

粗末な扉を蹴破らんばかりの勢いで納屋に飛び込んだ僕が見たものは、まさに地獄絵図としか言いようのない、凄惨な光景だった。引き千切られた制服の残骸。全裸のサヤカ。苦痛と絶望の絶叫。そして、サヤカに覆い被さって巨体を揺さぶる、白い獣のような、得体の知れぬ異形の巨躯。

「うわああああああっ！」

恐怖と怒りに駆り立てられた僕は、そいつの頭部に思いっきり鉈を叩きつけた。ガツン！ という衝撃。飛び散る鮮血。何よりも最悪だったのは、振り返ったそいつの眼が間違いなく人間のそれだったことだ。僕は半狂乱になりながら、二本の角が生えたそいつの頭部めがけて、何度も何度も鉈を振るった。

……僕が発見されたのは、飛び散った血と脳漿が壁一面にこびりつく小屋の中、無惨に顔面を叩き潰されたサヤカの屍肉をむさぼり喰っているところだったそうだ。全ては白い鬼の仕業であるという僕の主張は、小屋の中から何の痕跡も発見されなかったことと、サヤカの体内から採取された精液が僕のものと一致したことで否定された。僕は逮捕されたが、精神鑑定の結果、心を病んでいると診断されて専門の療養施設に送られることになった。二度と社会に復帰することは叶わないかもしれないが、不満はない。何しろ、あの忌々しい村をようやく出ることができたのだから。

雪に覆われたあの山を思わせる真っ白な部屋の中。満ち足りた気分で壁を眺める僕に呼びかける者がいた。誰かと振り返ると、サヤカだった。長い髪は真っ白に変じ、生え際の辺りから振じれた角が二本、天井に向かって伸びている。

「やあ」

僕の笑みに、彼女は微笑を返してくれた。
その手の中の、血塗れた鉈をぬらりと光らせながら。

(了)

05藤森ひろ『雪解けをあなたと』（予備選考通過作品）

しょうこ
梢子は小さな市立博物館から林の中の小道を通して辿り着く、ログハウスのカフェの前でとうまを待っていた。

月が、積もった雪を明るく照らしている。吐く鼻息が白くなるほど厳しく冷え込んでいて空気に触れている肌が痛い。白い毛糸の帽子を引き下ろして耳を覆い、コートの際を首許に寄せ集めた。手を覆いたくて手袋をポケットに探ったがなかったのでそのまま突っ込んでおいた。

「月が清かだが雪が降らないのが残念だな」

きゅ、と一歩雪を踏みしめる音がして、雪が映し返した月明かりのように青い、半分透けて見える男性が梢子の前に現われた。今日も藍色のシャツに同じ色のジーンズと言う出で立ち。コートを着ていればそのまま町を歩いていて何の不思議もない外見である。けれど彼の姿はガラスで出来た像のように今は半分透けていて、髪に雪が積もる様は冬の祭で見かける氷像を思わせた。

「身体透けてるね。雪が降ってないからかな」

「そのようだな。困ったものだが仕方ない、自分でもどうにも出来なくている」

「いつも暖かい場所に連れてってるけど大丈夫？」

「構わぬよ。雪そのものは売るほどだろう。さ、梢子は夕餉を取るがよい」

二人はカフェに入った。

店内には客が三、四組ほどいて、客の話し声とそれを邪魔しないくらいの音量で音楽が流れていた。二人は重厚なぶなの一枚板のカウンター席に並んで座り、梢子は具沢山の根菜スープにパンとサラダのセットを、とうまは冷たい緑茶を注文した。

雪が積もり始めた頃に出会ってから週に一度はこうして顔を合わせている。食事をするのは梢子だけでとうまはいつも冷たい飲み物を静かに飲む。

その日一日の出来事や思ったことを、笑いを交えながら梢子が聞かせるうちにサラダとパンが運ばれてきた。

「花を売る仕事と言うのは人生が垣間見えると言うわけだな」

「どんな人にどんな気持ちを贈るのかなあとと思いながら作るからね。だって花を贈るって気持ちを贈る、伝えるってことだものね」

「そうだな。きっとお前の作った花束は喜ばれているのであろうよ」

「喜んでもらいたくて作ってるから、そうなら嬉しい」

「伝えるということ、と申したな」

言いながらとうまは、視線をゆっくりと緑茶のグラスから梢子の瞳へ移す。次に運ばれてきた根菜のスープをなるべくとうまから遠ざけるように、梢子は自分のすぐ前に引き寄せて一口、口に入れた。野菜の甘みが地元で作っているベーコンの塩味と良く合っている。飲み込むと甘みと熱が身体に入って、その美味しさがもう一口を誘った。

「派手じゃないけど、幸せが長続きする味だ。美味しい」

ごろごろと素朴ながら賑やかに入っている野菜の中からじゃがいもを選んでスプーンで割り、

口に運んで噛んでみる。

「あー美味しいなあ」

ね、とあえて隣にいる存在にも勧めようとしてにこっと笑顔を向けた。とうまは穏やかに笑みを浮かべ、静かに低い声で言った。

「わしは温かい料理は苦手だと存じて居ろう、はぐらかすでない。人が誰かに思いをこめて渡す花束。それを作ると言う仕事をしているお前自身はどうなのだ」

「なんか偉そう。人外の存在だからって何でも見透かしちゃって」

「世が世ならお前はわしと夕餉の席に共に着くなど有り得ぬのだぞ。偉くて当然だ」

梢子はそれきり黙って、スープとサラダとパンの一かけらも残すことなく食べ終えた。

カフェを出た二人はきゅつきゅつと音を鳴らして雪の上を歩いていく。月は変わらず明るかったけれど、その光の中に雪が舞い降りてきていた。

雪は結晶が幾つも集まって綿のようになって空から落ちてくる。とうまの藍色のシャツに落ちた一片を間近で見つめ、梢子は見て感じたままを言葉にした。

「結晶が一つ一つくっついてる」

「うむ。綺麗だな、やはり雪は美しい。わしは雪が好きだ」

「……」

綺麗だと感じた心に対しての答えはなかったが、とうまは腕を組んで満足そうに頷いた。

「良いものだな、こうして好みを語りあえるというのは」

「……うん」

短い間の後に梢子は同意して、けれどとうまから顔を背けた。とうまはそれに気付いて眉を寄せ、手に腰を当てて溜息をついた。

「また。逃げるように顔を背ける。いい習慣とは思えぬな」

梢子は言い返すことが出来ない。顔だけではなく身体ごと向きを変えてとうまに背を向けた。

「たかが恋を一つ失っただけだろうに」

「いいでしょ別に。恋人がいなくなったら別に寂しくないし」

「そういわせる心根の奥が問題だな。それでまあ良くも贈り物を扱う職に就いているものだ」

「……雪が降ってきたから生き生きしてる。ムカつく」

「何とでも言うがよい。うむ、精気が漲る思いがするぞ。雪は良い」

とうまは腰に手を当て胸を張って空を見上げた。

月には雲の端が薄くかかり始めていて、だんだんと雪の降る勢いも強くなってきていた。

「もう今夜は帰る」

「また語ろうぞ。お前の心の雪解けが先か、わしが消えるのが先かな。楽しみにして居る」

「見た目細身なイケメンのくせに。何、年寄りくさい物言いしてんだか。名前も変だっつうの」

梢子は振り向かず背を向けたまま歩き出した。が、立ち止まって振り向き気味にぼそっと言った。

「……またね」

とうまは笑いながら透けて行き、やがて消えてしまった。彼に降り積もっていた雪だけが地面にゆらゆらと落ちた。

梢子は視界の端でそれを確認して帰路に顔を向けた。静かな風に舞い上げられ不規則に翻弄されては落ちる雪の片達の中を一人歩いてゆく。軽口を叩いた後に、あったはずの存在が消えてしまった空間がぼっかりとしていた。それを埋めるように果てもなく雪の降り方は強くなった。ふーっ。

真っ直ぐには地面に落ちない雪が埋める空間を、梢子が見えない相手に向かって言葉の代わりに送り出した呼気が、直球のような軌道を白く描いた。

お前の心の雪解けが先かなどと言って、とうまは突かれたくない所を突くから腹立たしい。

梢子はもう一度呼気をふーっと空間に放った。ぱっと腕を突き出し両の手の甲で、それを遮る真似をする。

心に巣食う恐れや弱さをなぞるような行為を、とうまが見ていたら「ばかものが」と笑って許してくれるような気がした。

二月も半ばになろうかと言う翌週。梢子は博物館の入り口を飾るアレンジメントの配達がてら、そこに勤めている若菜を訪ねた。するとにやにやと、とうまのことを尋ねて来た。

「付き合ってるんでしょ？羨ましいわ、そんなに頻繁にデートしてて」

「茶飲み友達みたいなもんよ。説教臭いし、上から目線だし、年幾つなんだろ？」

「それにしては楽しそうじゃない。上書きしなよ、前の恋なんて。前の人のことは辛かったと思うけど」

不満を零したつもりが正反対のことを言われて、梢子は慌てて返す言葉を考えた。けれど一方では飄々とした風で、決して口がよいとは言えない自分の話し相手になっているとうまの時間を楽しみにしている自分にも気付いた。

「悪友って感じかな、とうまとは。それに昔のことはもういいよ……忙しすぎたからね、お互いに。好きでも伝わらなきゃね」

「フラワーアレンジメント勉強したのはあの後だもんね」

「いい仕事に就いたと思うよ。人の気持ちを贈るのがお花だし」

「自分の気持ちはどうなのよ。ああもう、梢子に早く見せてやりたいわ。新たに見つけた古文書が恋文みたいでね……市民で勉強会開いている方々と一緒に解説することになってね」

「へえ、誰が書いたものなの？」

「あの人よ」

若菜は展示室のほうに顔を向けた。

「雪の好きなお殿様ね。名前何て言ったっけ」

「許すに是と書いてもとゆきという方よ。ちょうど雪が積もり始めた頃に見つかったのよ。受け取った人の家の蔵にずっと眠っていたのですって」

梢子は展示されている一枚の着物のほうに目をやって頭にその文字を思い浮かべた。なるほど、言午だった。

かつてこの地を治めていた領主が使ったと代々言い伝えられてきたものが、この博物館には展

示されている。さして歴史に興味のない梢子だったが、親友の若葉が一年ほど前に務め始めて以来、一度見てみたらと誘われていたのを受けたのが雪が積もり始める頃だった。

その領主、殿様の持ち物だったと言われている刀だの食器だのどこの誰に土地をやったのという書状だの、ただ物が並んでいるだけに思えた中、目を引いたものがあつた。

その領主は雪が大変に好きで、この雪深い土地を治めるに当たっても不満を一つもこぼさなかった。その美しさを表した模様を幾つも残していたり、文章でもそれを残しているとの説明が添えられた着物だった。

様々な雪の模様を織り込んだ藍色の着物に梢子は目を奪われた。六つの枝を持った結晶のイメージに繋がるような、白い模様の数々。

好きなものを衣装にあしらった人がいた。雪を好きだった殿様と言う人が急に人格を持ったように感じられた。

着物には模様と共に着た人の想いがこもっているような気もして、久しぶりに雪を綺麗だと思えた。

雪には本当に苦勞する。市の予算だってどれだけ食われるか。一晩で膝が埋まるほどに積もった雪を早朝から除ける日々が続く冬は正直うんざりだ。

小さい頃は好きだったのにいつからだろう、雪を綺麗だと、好きだと思えなくなったのは。

全てを埋め尽くして真っ白にしてしまう雪。暗闇に灯が照らし出す空間を果てることなく舞い狂って埋め尽くして行く様を思うと、脳裏に焼きついたその映像から思い切り目を逸らしたくなった。

それは自分が恋人を失った日の風景だった。あの日も雪が降っていた。

仕事が忙しすぎてなかなか会うことが出来なかったその挙句、恋人は遠方に転勤となった。どうにかたどり着いた空港で向かい合ったとき、二人は無言で立ち尽くしていた。

恋人が重い口を開いた。

「最後に二人で見たのが、雪だね。綺麗だ」

「……雪なんか大嫌いよ」

恋人はその言葉に寂しい笑顔を向けて諦めの最後の言葉を梢子に告げて去った。

「離れている間にそこまで気持が離れていたのに気付かなかった。僕が馬鹿だね」

雪なんか好きになれるわけない。大好きなあなたと離れてしまう日に降った雪なんか。

言い訳も、止める言葉も、愛の言葉も、ありがとうも言わないままに別れることになった。

ほんと、馬鹿。雪国育ちの私にそんなこと言うなんて。

場所は違ってもやっぱり雪は白く降り積もって、月じゃなくて街灯に照らされてもきらきらしていた。

綺麗だと思ったものを綺麗だねと、一番伝えたい人を失い、多忙を極めた仕事に磨り減って、梢子は故郷に戻ってきた。恋人を思えば最後の日の雪が、見えない雪が記憶から心に降り積もって凍りつくのだった。

その日の晩、梢子ととうまは窓際の席に向かい合わせに席を取っていた。

梢子は食事を終えてコーヒーを、とうまは冷たい緑茶を飲んでいた。

「今日ね、若菜から聞いたんだけど。雪の好きなお殿様の恋文が見つかったんだって」

「知らんな」

「誰に書いたの？教えてよ、どうせ私の知らない人なんだし」

「あれはどこから見つかったのだろうな」

とうまは少し気まずそうに顔を窓の外に向け、視線だけを梢子に寄越して確認してきた。

腕組みして重なったシャツの藍色が一層濃くなり、展示してある着物の色に近づいたように見えた。

黙って、視線を窓の外の遠くに投げたとうまは目を細め、口の中で何か呟いている。

一度目をつぶり、見開くと梢子に告げた。

「今は好いた男女が自由に夫婦になれるのであろうが、あの頃は違った。わしも祝言を控えて居ったし、まあ不毛な想いと言えそうさ」

「不毛って！思っていることにだって意味があるじゃない」

「意味がある場合も大いにあるがな。例えばわしの存在だ」

歴史に疎く知識の浅い梢子は知らなかったが、その書状が領主が書いたものだと言う確固たる証拠を裏付けるのが大変なのだ。それは書状に限らず博物館に展示してある品すべてについて言えることだが、そのことと同じくらい、この地域に住む人々が昔から大切にしてきた品であることに意味がある、ととうまは言う。

「そこにあるのは人々が伝えて来た想いだ。わしという存在に寄せた想いだ。それがなければ、わしなど過ぎた時間に消え去ってただの記録でしかないに等しい」

「私、とうまと話をする時間、……大事に想ってるよ」

梢子のその言葉に目を見開いて一瞬驚いた後、とうまはにかつと笑った。

そうして手を伸ばしてきて、わしわしと梢子の頭を撫でた。

「そうさ、そうやって伝えてこそだ。うまく言えたではないか……わしの居る間に十分間に合って、お前が気持ちを伝えるのを聴けたな」

そのうちにとうまはいなくなる。とうま自身がそう言っているのだからそうなのだろう。雪が降れば生き生きして温かいものを食べられないこの存在と、春の雪解けを共に迎えることはないように感じる。

とうまは、もうこの世にはいない人。本当に偶然に出てきちゃっただけの人。雪が好きな昔のお殿様。

来月は卒業式シーズン。梢子が扱う花たちは、スイートピーやフリーズア、香澄草にトルコギキョウ、バラにチューリップ。花束は春の色で華やかに彩られる。今は一年で一番寒い厳寒期だけれど立春はもう過ぎた。春は、雪溶けは遠くはない。

「梢子」

とうまが軽い飄々とした雰囲気は消して、真剣な声で梢子の名を呼んだ。

「わしの文だがな。相手に届いたかどうかをわしは知らぬのだ」

「え、じゃあ本当に不毛なままの恋心だったの？」

「……それがまた見つかったそうではないか。まあそれなりに楽しく過ごしてこの世を去ったわしだが、それが心残りと言えば心残りだったのだ。まったくお前の口の悪さには辟易するの」
だからなのか。

腕を組んで、不機嫌そうに片手であごを擦るとうまを見て、口の悪いのはお互い様と思いながらも梢子の胸からは「伝えてこそ」の言葉が消えなかった。

三月に入ると花束やアレンジメントの注文が殺到し、梢子は多忙を極めた。沢山花束を作り、沢山の人の気持の橋渡しを手伝った。三寒四温の言葉の通り、彼岸を過ぎる頃には硬く凍りついた雪も緩んで、林の木々の根元には円く土が顔を出し始めた。

しばらくとうまには会えていない。このところの陽気からして博物館脇の林も雪解けが進んでいるだろうと思った。

口の悪い、雪の好きなお殿様。とうまは消える。もう消えている人。けれど、伝えたい想いが梢子にはあった。勤め先の花屋のショーケースから白い花ばかりを選び出し、青いリボンで束ねて花束を作り、とうまに会いに向かった。

博物館脇の林の中、まだ雪が残っている奥に、展示してあるのと同じ雪模様の織り込まれた着物をまとったとうまがいた。

「会えて良かったぞ。わしもそろそろのようだ」

「うん。良かった。伝えたいこともあってね」

「そうか」

にかっとうまは笑う。

「あの恋文ね、受け取った人の子孫の方の蔵から出てきたんだって」

梢子は白い花束を手渡ししながら伝えた。

「良かったね、伝わってたよきっと」

「……左様であったか。ならばわしも救われるな、不毛などではなかった」

とうまと梢子は互いを笑顔で見詰め合った。

ああ、これは春の……いい匂いだな……

その言葉の終わりは掠れて、目の前のとうまは消えていった。後にはぱさりと花束が落ち、落ちた場所にはふきのとうが芽吹いていた。

「ありがとう、許是様。……私、雪、好きだよ」

もう届かないけれどその人にそう伝えることを、春を迎えた梢子は不毛だとは思わなかった。

(了)

降る雪は、あまりにも優しくかった。精進落としがまだ続いている斎場を飛び出した俺を包むように、柔かに雪が降る。祖父の火葬の時間は午後三時過ぎだったからもう辺りは暗かった。精進落として断れずに飲んだビールはとうに醒めていた。

^{てつお}
「徹生は命をじいさんにもらったようなもんだから、しっかりやりゃんとな」

遠い親戚の人が何気なく言った一言が胸に痛い。それを忘れていなかったはずなのに、俺は逃げ出してきた。結局、遺影の中の笑顔に包まれながら今も逃げている。ゆるゆると落ちてくる雪は羽のように俺の頬を撫でて溶ける。冷たいのに優しい感触は、その一言と一緒にあって、俺を抱きしめたあの時の祖父の腕の強さを思い出させた。

——ああ良かった。なあ、徹生やあ。

そんなに優しくしないでくれ。そんなに暖かく包み込まないでくれ。俺は旅行バッグを脇に抱え、わざと雪にぶつかるように駅に向かって走った。何でだ、今日に限って雪があの時のように、七色に輝いて見える。

山間の、スキーヤーで賑わう町の駅から小樽行きの列車に乗り、俺は座席に深く腰を下ろした。五日も留守にしているアパートも気になるし、大学のゼミにも顔を出さないと。言い訳をしなければ、街を離れられない。だが実際は大学で付き合いのある友達などいないも同然だった。親切にされるのも優しくされるのも苦手だ。苦しくなる。

雪が七色に見えるのなんて、きっと俺、涙ぐんでるからだ。大体もう外は暗くて、見えるのはせいぜい列車が蹴立てている雪煙くらいのはず。それも言い訳だと自分で判りながら手で目を擦った。それでも窓の外に降っている雪が、光を滲ませたような色を灯して、ゆっくり舞っているように見えた。

……有り得ない。五日前に祖父が危篤だと知らせを受けて札幌から実家に戻って以来、入院先に母と交代で詰めていた。疲れてるんだ。そう思いなおして目を閉じ、指で目頭を押さえた。

ふと、足音が近づいてきてすぐ横で止まった。見上げると、若い男の人と目が合う。

「お晩です、徹生君」

驚きのあまり声も出ない。俺の名を呼んだ見知らぬその人は、何度も洗って薄くなったような青色の作業着を着て、つばのついた帽子を被っていた。今乗ってきたのか、服に付いた雪が虹のようにきらめいている。俺と同じくらいの歳に見える彼は、日に焼けた顔に白い歯が印象的で、明るく笑っている。

「会わせたい人があるんです」

その時、ぼおーっと……汽笛が鳴った。短く二度、三度目は少し長く音を残して。

「ほら呼ばれた。さあ行きましょう」

気付けば重たく低い——蒸気と、車輪が鉄を叩く音が聞こえてきていた。がたがたと車体が揺れてスピードが緩み、やがて駅のホームに止まった。訳がわからないまま腕を引かれて列車を降り、前方に連れて行かれると、煙を吐き出す黒い鉄の車体から顔を出して手を振っている人が見えた。

「テツやあ、機関助手頼むわ！」

「お、俺？」

「はい！松雄さん！」

テツ、と呼ばれ返事をしたその男の人が扉を開けて運転室に乗り込んだ。

「……松雄さん、って」

今日、煙になった祖父の名は松雄と言った。

……俺、死んだのか？あの日の続きなのか？降る雪は七色に灯っているし、ホームの屋根と、黒い車体の間から夜空を見上げて思い出すのは、溺れた水中から見上げた川面だ。

「乗れや、徹生」

運転室にいる松雄さん……じいちゃんに笑顔向けられ、慌てて乗り込んだ。そこは熱くて、煤の匂いが充満していて、後ろには石炭を山積みにした箱がある。写真で見た通り、蒸気機関車の運転室だ。じいちゃんは真冬なのに汗だくで袖をまくり、太い腕で額の汗を拭っていた。顔も帽子も服も煤まみれだ。知っているじいちゃんよりも若いけれど見ていると安心する笑顔は同じだ。

「じいちゃん？何で運転出来るんだ？」

「じいちゃんな、昔々、機関士だったのさ」

「駅勤務だったってことしか、言わなかったじゃないか」

「もう乗らねえって決めてたからな。さ、出発進行だ」

俺の頭を右手で撫で、じいちゃんは窓際に下がっている棒を引いた。ぼお一つ。呼吸するように汽笛が鳴る。じいちゃんの両手が器用にレバーを操り、汽車が動き始めた。テツさんが石炭を投げ入れ始め、機関車は徐々に加速していった。

「けど、一度お前を乗せてやりたくてな。いいぞ、テツよ。この先の勾配はきついぞ、けっぱれ！」

「はい！」

テツさんは必死に投炭を続け、赤々と燃える様子を確認してふたを閉めた。

「蓋閉めました！」

「よし！」

じいちゃんが計器のメーターを確かめてレバーを操ると、機関車の速度が滑らかに上がっていく。

「さすが松雄さん、いい塩梅に蒸気を使ってくれますね」

「ありがとな、テツ。お前が相方だからいいのさ……感謝してもしきれねえ。無理を通してもらって済まんかったな。俺はお前を見捨てたってのに」

じいちゃんは笑っていたが、切なそうな顔をしていた。

幼い頃、よく二人で眺めた写真集、「さようなら蒸気機関車」——デゴイチ、シロクニ。これはシゴナナ、貴婦人な。一つ一つ写真の上に指を置いて、懐かしそうに語る声を、俺はじいちゃんの手の上で聞いていた。ふっと温もりが離れることがあって振り返ると、じいちゃんは機関車の写真の運転室辺りをじいっと見ていた。その時と同じ顔だ。

「しゃあなかったですよ、松雄さんみたいに腕のいい機関士をなくすわけにはいかんかったん

です。俺はしがない助士でしたから」

「したって、なしてお前だけ出征しなきゃならなかった。鉄道員は徴兵を除外された者が多かったのに。俺はお前をただ戦地に送るだけで……」

帰って来たのは空っぽの壺だけで、とじいちゃんはテツさんの肩を掴んで泣いた。

「もう十分、自分を責めてくれましたよ。それを分かっておられたから、あの日、徹生君に助けられて生きて来られたんじゃないですか」

「……違う！助けてもらったのは俺だ！なのにずっとじいちゃんを避けて、今日も！」

早くに父が他界して俺の家族は母一人、それに祖父一人。母は仕事で留守がちで、一人の夕飯を美味いと思ったことはなかった。じいちゃんは可愛がってくれたけれど、寂しい気持ちのまま一人で川べりにいることが多かった。よく、ちぎって投げた草が流れるのを眺めていたものだ。

川に落ちたのはそんな風に時間をやり過ごしていた、小学校一年の初冬だった。全身を痛いほどの冷たさが覆い、恐怖にもがく俺を手繰り寄せたのはじいちゃんの腕だった。助けてくれたのは、たまたま通りがかったじいちゃんだった。冷え切った俺を、七十半ばの歳に似合わない強さで抱きしめてくれていた。――ああよかった。なあ徹生やあ、徹生……ありがとよ……。温かい雫を顔に感じ目を開けて見たものは、涙ぐんで笑うじいちゃんと、光を滲ませて虹のように灯った雪が降っている光景だった。

「じいちゃんはそのせいで……俺のせいで右腕が不自由になったんじゃないか」

――徹生はしっかりしなきゃいかんなあ。母さんを助けて、じいちゃんにも良くしてやらなきゃならん。その後の周囲の言葉と視線に俺は怯えた。右腕が使えなくなった姿を見るのも辛くてじいちゃんから遠ざかり、俺は街を出て札幌の大学に進学した。

「徹生。じいちゃんな、お前に生きる意味をもらったんだ」

じいちゃんが長く汽笛を鳴らすと、外ではあの雪の明かりが輝きを増し始めた。

「俺と一緒にいりゃあお前は安心した顔したからな。ちっとは役に立つかと思った。川っぺりにいるお前を見てたんだ」

「たまたま……じゃなかったのか」

「俺を戦地に見捨てたって自分を責めてた松雄さんが、徹生君を見守る役目を見つけたんです……大きくなるまで、見ててやりたいって。あれじゃ、連れて行かれなかったです」

「まだ生きてえって思って、テツに、そっちに行くのを待ってくれって頼んでなあ」

テツさんは笑った。じいちゃんは頷いて、優しい顔を俺に向けた。

「徹生やあ。お前と過ごせて俺は本当に救われたし、楽しかったんだ。だからもう気に病むんじゃないぞ」

ぼおーっ。二人の笑顔が、汽笛と共に輝きを増した、雪のあまりの眩しさに包まれて行く。目を開けていられない。

わかったよ。……ありがとう、ごめん。

長い汽笛の音は胸の奥深くを直撃し、それまで詰まっていた管がぶち抜かれたように俺の涙は止まらなかった。

それでも涙を拭って目を開けると、そこは確かに自分が乗った列車のドアの前で、乗換駅であ

る小樽のホームに滑り込むところだった。列車を降りると、ふわふわと雪が舞っていた。その一片が俺の肩に灯る。今日の雪はやっぱり七色に見えた。俺の中の後悔にそっと触れて寄り添うような、優しい降り方だった。その中を、俺は札幌行きの列車が待つホームへと急いだ。

（了）

光宏は波打ち際で遊ぶ娘を見ていた。娘は寄せては返す海の端を、スキップするように飛んだり跳ねたりしている。波の動きが面白いらしい。スカートの裾がわずかに濡れているのは飛沫から逃げそこなったのだろう。しかし彼女はとくに気にしているふうでもなく、ときどき楽しげな嬌声をあげながら、飽きもせず海と浜の境界で戯れていた。波はひとときとして同じ形を保たず、持ち上がっては砕けながら広がり、やがて小さな泡と音を残してその身を引きずり戻す。繰り返し、繰り返し、繰り返し。空気は冷えており、少し肌寒い。光宏は手にしていたカメラを目もとまで掲げ、愛する娘に呼びかけた。

「雪海」

彼女は振り返り、幼い笑顔をこちらに向ける。レンズを覗きながら手を振った。ファインダーのなかで娘の顔に照準が合い、光宏はシャッターを切る。

「パパもおいでよ！ 海、きれいだよ」

雪海が言った。光宏は答えずに微笑だけを返す。妻に似ていて、自分に似ていて、けどまだあどけない小さな命。二人の面影を二重写しにしたような小さな光。やがてポラロイドカメラは一枚の写真を吐き出した。光宏は写りを確認する。海を背景に、砂浜を足元にして、中心に佇む娘の見返り姿が写真に収まっていた。その彼女の周りを、たくさんの粉雪が包み込んでいる。飛び交い舞い踊る無数の雪は、光りながら宙を飾り、景色を明るくしていた。綿のように軽く柔らかで、水の結晶なのに、どこか暖かそうな、無数の白い輝き。

「ママにも見せてあげたいね！」

娘の言葉にうなずいて、眩しさに目を細めながら、光宏は空を仰いだ。雲ひとつない晴天が水平線の向こうから彼の背後の彼方までどこまでも伸びていた。抜けるような青空の頂に太陽が輝いている。いい天気だ。雪は、写真のなかにしか降っていなかった。

※

湊光宏がまだ二十代だった頃のことだ。上京して、なんでもいいからと職を探し、光宏が潜り込んだのは小さな映画会社だった。学生のころは写真家を志し、カメラ片手にあちこちへ撮影へと赴いていたが、人生を賭けるには自分の才能はあまりに頼りなく、生活の足場を固めるための第一歩は、己の可能性を見限ることだった。光宏は写真で生計を立てる夢を捨て、安くても毎月確実に給料が入る仕事を選んだ。映画会社では雑用から撮影助手まで細々とした仕事をなんでもやらされた。とある現場で、光宏は女優志願の若い女性と知り合った。瀬川絵美という名だった。

時間あるなら、お茶でもどう？ 言葉の詳細は違うかもしれないが、だいたいそんな感じの月並みな文句で誘い、手近な喫茶店に腰を落ち着けて、光宏と絵美は最初の二人きりの時間をも

った。絵美に声をかけたことに特別な意味はなかった。当時、光宏に特定の恋人はいなかったし、たいした刺激もない退屈な日常に倦みもしていたので、少しでも生活に彩りが添えられれば、という気軽な心持ちで絵美に近づいたのだった。

絵美とは初めから話が合った。会話は停滞も緊張感もなく、リズムよく続いた。好きな映画、嫌いな食べ物、家族構成、血液型、いちど旅行に行ってみたい国、ふだん聞いている音楽、仕事場の愚痴など。たあいのない話がとりとめなく続き、そのなかで光宏は彼女との間にいくつもの共通項を見つけ、彼女のもつ好ましい特徴や美点を見出した。笑うときにできるえくぼや、ときどきゆっくりとするまばたきに好感を抱いた。

「どうして女優になんてなりたかったの？」

光宏が尋ねると絵美は

「映画はいつまでも残るから。それが名作であれば、なおさら」

そう言ったとき、彼女の瞳には、それまでとは違う真剣そうな色が宿った。

「私が歳をとっても、映画のなかの私はそのときの姿でずっと残るし、私がこの世からいなくなったあとも、作品は残るから」

生まれ変わったら何になりたいか、という話題で、光宏はアサリになりたいと言った。

「アサリ？ えっと、貝になるの？」

「そう、アサリ。貝になって、海の底で、砂の中で、静かに呼吸をしたいな」

「変わってるわね」

「瀬川さんは？」

「私は、そうだなあ……」

二人で過ごす時間を重ねるうちに、当然のように仲は深まり、自然なことのようになんか恋人どうしになって、瀬川絵美は湊絵美になった。光宏と絵美は、夫婦になったのだ。

絵美の実家に挨拶に行くとき、光宏も人並みに緊張した。彼女の郷里は日本海に面する小さな町で、挨拶の日は、あいにく雪だった。九州から出てきた光宏にとって、それは新鮮な雪景色だった。

「こんなにたくさんの雪をはじめて見たよ。すごいものだね」

瀬川家へ向かう新幹線のなかで、車窓から外を見ながら、光宏は素直に驚きを口にした。

「明日にはきっと、一面、真っ白になるわ。町じゅうが雪に埋もれるのよ」

「とんでもないところに来ちゃったな」

「ひどいこと言うのね」

絵美は笑った。浮かんだえくぼに、光宏は唇を寄せた。

結婚して一年目に女の子を授かった。娘の名前をなんにしようと二人で考えているとき、光宏は提案した。

「雪、って字を使いたいな」

「雪か。寒々しい名前にならない？」

「いいよ。寒いのも、冬も、好きになったから。きみの名前が絵美だから一字とって、雪絵か雪美にしようか」

「なんか、ありがち。もう少し個性的なのがいいな」

「あ、じゃあ」光宏は思いついて言う。「雪の海と書いて、ゆきみ、っていうのは？」

「ますます寒々しくなってない？」

「でも、きれいだろう？」

「そうね」

睫毛にのった雪さえ落ちないような、ゆっくりとした動きでまばたきをして、絵美はうなずいた。

二人の暮らしに新しい命が加わる。これからは三人で生きていくのだ。平凡でも暖かい家庭が築ければいい。そう考えていた光宏の淡い展望は、形にならなかった。

雪海が生まれ、短い期間で、絵美が死んだ。

絵美はもともと心臓が弱く、出産にも不安があったが、彼女自身の強い意志と希望もあって、雪海を産んだ。絵美は強い心をもっていたが、その体には、心につりあうほどの強度はなかった。絵美が最後に貫いた意志が、結局のところ、彼女の命を縮めることになった。

光宏は絵美の手を握って、涙がその手に落ちるのにも構わず、ありがとうと言った。

「いい子に育てるよ。きみの子なんだ、間違いはない。雪や海が暖かいものに思えるくらい、優しい子にする。だからきみは安心して、先に海の底で待っていてくれ」

「海の底？」

「いずれ僕もアサリになるから」

絵美は少し笑った。

「私はアサリになんて生まれ変わらないわよ。私は、」

最後の表情が笑顔でよかった。それだけでもよかった。もう、えくぼも浮かばないほど弱々しいものであったとしても。

※

絵美が亡くなってから、光宏は雪海の写真をたくさん撮った。初めて自分の足で立って歩けるようになった雪海。誕生日にケーキを食べる雪海。公園でブランコをこぐ雪海。写真はすぐに何十枚にもなった。アルバムはいっぱいになり、二冊、三冊と増えていった。娘の写真を撮ることで、光宏は久方ぶりにカメラを扱うことの楽しさを思い出すことができた。そして娘の成長を見守ることが光宏の生きがいとなった。妻の面影を娘の顔や仕草に見つけるたび、妻が生きていたこと、確かに同じ時間を過ごしたことを思い出して、胸があたたかくなるのを感じた。雪海を撮ったうちの何枚か、不思議な写真があった。雪海のまわりに雪が降っているのだ。晴れている日の写真や、屋内の写真であるにも関わらず、切り取られた風景のなかにだけ、存在しないはずの雪が写っていた。ありえないことだ。だけど、光宏にはわかっていた。それらの写真を、彼は、娘以外には誰にも見せない。

「私は、生まれ変わったら、雪になりたいな。あなたと雪海に会うために降ってきたい」

写真にだけ現れる雪は、いつも雪海を包むように、守るように、そばにいた。

光宏は今しがた撮ったばかりの写真に改めて視線を落とす。雪の幻が降る光景のなかで、波打ち際に立つ雪海はこちらを振り返り、微笑んでいる。その幼い頬には、ひかえめな、しかし愛らしいえくぼが、小さく浮かんでいる。

(了)

＊

雪が降っています。

その音はあなたの耳にも届いていることと思います。あなたはよく言いましたね。

「聞こえない？ 雪が降り始めたよ。カーテンをあけてごらん」

そんなときカーテンをあけて外を見渡すと、屋外にはいつも本当に雪がちらついていました。

幼い時分には疎ましく思ったことも幾度となくありましたが、私は自分の親と、人並み以上に裕福な家庭、そしてその筋では名のある家系に生まれついた幸運に感謝しています。あなたと出会えた大きな要因が私の家の家柄にあったのは否定できないからです。普通は、あなたから直接にピアノのレッスンを受けるなど、望んでも叶うはずのないことでした。あなたは当時からピアニストとしても作曲家としても業界で名を馳せていた著名人だったから、あなたの教えを乞いたいピアノ弾きは、到底数え切れなくらいいたはずです。そんななかで、私があなたの教え子となれたのは、親の本格派志向と、財力とコネクション、それらがなし得た結果でした。両親は私を最高のピアニストに磨き上げるべく、最高の教師としてあなたを引っ張ってきたのです。でも、私はあまりいい生徒ではありませんでした。生意気で可愛げのない教え子だったと思います。生まれつきのピアニストのように勘だけで自在に鍵盤に指を踊らすことができた私は、あなたと会うまでの間ずっと、ピアノで数々の誉れを受け、才女として持て囃されてきました。ピアノの天才だと誰からも褒めそやされてきました。そのことに、いっばしのプライドがありました。自分のピアノの弾き方に自負と自信を持っていました。だから、せつかくのあなたのレッスンにも、最初のうちはなかなか身を入れることができませんでした。あなたの教えを素直に受け入れられず、未熟な我を通したりもしました。立場をわきまえないで、何かにつけ反発しました。あなたは言いましたね。

「きみの弾き方は正直だし小綺麗だ。だけど、洗練されていない。左手の運指に悪い癖がついている、それはきみ自身も気づいているはずだ。どうして直そうとしない？ 今まで誰も指摘してくれなかったのか？」

あなたの教えは的確だからこそ耳が痛く、その場しのぎの言い訳でいつも私は突っぱねていました。だけど私は、次第に、あなたのはっきりとした物言いに、的を射たアドバイスに、優れた音楽的センスに、大きな信頼を寄せるようになっていきました。おおらかな人柄に、口ひげを撫でる仕草に、穏やかなのに鋭い光も潜む目に、心を惹かれるようになっていきました。それは好意でした。師を敬う感情とは別の、恋心でした。一方的な憧れ、のはずでした。

まさか、そのあなたと結婚することになるなんて。

何があるかわかりませんね。

結婚を機に私がピアノをやめてしまったことを、あなたは残念がってくれたけど、私には未練

はありませんでした。私は一流のピアニストになるよりも、一流の音楽家たるあなたの妻として、あなたの支えになりたかったのです。私はあなたとの家庭を守ることに、残りの人生の全力を傾注したかったのです。私は私の心のなかのピアノにも蓋を閉め、鍵を閉ざしました。後悔はありませんでした。

あなたと結婚して最初の四年、なかなか子どもに恵まれないことを、私は気にかけていました。あなたもそうだったはずです。口にしなくともわかっていました。子どもを求めているあなたの心は伝わっていました。でもあなたは一度も本心を言葉にはしませんでしたね。

「構わないよ。焦ることはない、ゆっくり待とう。子どもは授かりものだからね。然るべき時が巡れば、僕らのもとにもちゃんと可愛い子どもが生まれてくるよ。それにね、こんなことを言うのはなんだけど……僕にとっては、作った曲の一つひとつが、楽譜に記した音符の一つひとつが、自分の子どものようなものだからね。既にたくさんの子どもに恵まれているから」

ピアノ教師としての職を退き、作曲業に専念するようになっていたあなたは、そんなふうに言いましたね。あれは気遣いの言わせた言葉だと私は思っています。私に対する気遣いです。私自身も危惧していました。あなたには結婚前に打ち明けていたとおり、私の体には、子どもが宿りにくい理由があったから。

結婚して六年め、私の妊娠が明らかになったときの、あなたの笑顔をはっきりと覚えています。待望の赤ちゃんの到来に、あなたは居ても立ってもいられないくらい、喜びに浮き足立っていましたね。子どもができたことを告げたその晩のうちに、あなたは新しい曲をひとつ作りました。それだけでもあなたの喜びの大きさが知れました。

「待ちわびた希望の訪れを祝う曲だよ」

目尻を下げて、あなたは私にできたばかりの曲をピアノで弾いて聞かせてくれました。私の胸も、その美しい旋律でいっそう高鳴りました。あなたと私のあいだに結実した命の胎動がそのメロディーに共振する音までが聴こえてきそうでした。あの晩から三か月ほど、私の耳にはずっとあなたの紡いだ喜びの曲が流れていました。でもその美しい音の連なりは、結局、とまってしまった。

子どもの命が生まれてくることなく消えてしまい、あなたと私は明け方までいっしょに泣きましたね。

あんなに悲しかったことはありません。私は私のなかで心臓をとめてしまった子のことを思い泣きました。あなたの深い落胆と失望を思い、自分の体の不完全さを思い、泣きました。そしてあなたが作ってくれた曲が、作られた意味を報われなかったそのことを思い泣きました。日に照らされた雪のように消えてしまった私たちの結晶が、自分のために奏でられた音楽を聴けなかったことに。

そう、雪でした。

いつの間にか夜が明け朝が来て、カーテンの向こうがほの白く光りはじめた頃、私たちの涙をとめたのは雪でした。雪に気づいたあなたの一声でした。

「音がするね」。あなたはふと顔を上げて言いました。「雪の降る音が」。私には何の音も聞こえはしませんでした。自分のすすり泣く声だけが室内の静寂に虚ろに響いているだけでした。あなたは立ち上がり窓辺に向かいました。はたしてあなたの手がカーテンをめくると、ガラスの向こうには本当に、小さく軽そうな粉雪が舞い散っていました。音もなく。

あなたの作曲する音楽が、すっかりその傾向を変えてしまったのも、あの頃からでしたね。あなたの紡ぐ音の連なりは悲嘆を彩るものばかりになった。暗く陰鬱な旋律があなたの嘆きを語っていた。あなたの弾くピアノはもう喜びを奏でなくなった。あなたのピアノは現実を生じる無情さばかりを歌うようになった。だけれど、それらの曲たちはどれも、悲しいくらい美しく、聴く者の耳朶を否応なしに震わせるものでした。

あなたが年末のコンサートからの帰り道、車にはねられ病院に運ばれたという知らせを受けた私は、ろくに外出の装いを整えることもなく上着だけを肩に引っ掛けて、家を飛び出しました。

ベッドの上で目を閉じているあなたは、ただ眠っているだけのようにも見えました。けれど、一日たっても、二日たっても、あなたが眠りから覚めることはありませんでした。一週間たっても、一ヶ月たっても、あなたが目を開けることはありませんでした。お医者さまの下した診断は残酷なものでした。あなたが再び意識を取り戻す可能性はほとんどない、という話でした。あなたは知覚を失い、言葉を失い、体の自由を失い、ただじっとして呼吸をするだけの、植物のような在りようとなりました。

私はあなたの顔を見るために病院に通いました。毎日、枕元から話しかけ続けました。お天気の話や草木の話、空を舞う鳥の話など、他愛もないことを。あなたの顔色に変化はなく、聞こえているのかも判断できませんでした。あなたはただ静かでした。静かで、無反応でした。

けれど、そんなあなたが、唯一反応を示すことができました。

雪です。

不思議なことです、外に雪が降り始めると、あなたの脳波には、はっきりと特別な振幅が現れるということです。それは感覚がある証拠だとお医者さまも言いました。あなたは目をあけることも口をひらくことも指一本うごかすこともないのに、雪の降る気配にだけは反応するのだそうです。私はあなたの言葉を思い出します。

「聞こえない？ 雪が降り始めたよ」

雪が降っています。

雪が降っています。

今夜も静かに雪が降っています。その音が今ならわたしにも聞こえてきそうです。

それはあなたの音です。

それはあなたの声です。

わたしもようやく気づきはじめました。

雪が降っています。

(了)

「あなた、寒いわ。窓を閉めて下さらない？」

エリーズは震える声でアントワヌに問いかけた。

「そうかい？ 外はこんなに暖かいよ。君は部屋に閉じこもって、ベッドの上にばかりいるからそう感じるんだよ！」

ほんとに自分の思いすごしなのかしら？ エリーズは自分でもそう信じかけた。しかし、雪国育ちのエリーズは思った。この気温では、いつ雪が降ってもおかしくない。それなのに、アントワヌは半袖のTシャツ姿。

もちろん、スポーツマンの男性なら冬でもそういう格好をしている人がいる。しかし、彼は違う。エリーズが学生時代に知り合ってから、彼はスポーツとは無縁の人物だった。身体を動かすことはおろか、スポーツ観戦さえしない。むしろ読書や美術館巡りを趣味とする、しがない証券会社の販売員にすぎない。

その彼が今年の冬から人が変わったようにエリーズは感じていた。

「本当に寒いよ。凍えるほどよ！ お願いだから、ストーブを点けてくださらない？」

エリーズがアントワヌと住む部屋のヒーターは去年の冬から壊れたままだ。今年になって、押し迫る寒さに怯えるような不安を感じたエリーズはヒーターの修理をアントワヌに頼んだ。だが、彼はそんな彼女の言葉に聞く耳をもたなかった。

ようやくのことであのストーブを購入できたのは、エリーズが泣いて彼にお願いしたからだ。

「君は本当に寒がりだなあ。ノルマンディの生まれなんだろう？ 子供の頃からそうだったのかい？」

うんざりした様子でアントワヌはストーブの前に身をかがめてそのスイッチをいじった。それから彼はその腰を上げると、ストーブの上に片手を乗せながら窓の外を眺めた。

やっと彼がストーブに火を点けてくれたと安心したのもつかの間、ストーブの上に置いたアントワヌの右手から黒い煙が立ち上がっているのがエリーズには見えた。

「手がっ！ あなたの手が焼けているわ、アントワヌ！」

エリーズが叫び声を上げた。一方、アントワヌは特に慌てることもなくストーブから手を離し、痛みなど感じていないかのように自分の掌を少し見つめてから、エリーズに向きなおって言った。

「エリーズ、今日は一緒に外に出てみないか？ ずっと部屋に閉じこもっているのは健康に良くないよ」

アントワヌはほがらかに笑った。だが、エリーズは違った。今日こそこの町に雪が降る。彼

女は、このときが来るのをずっと恐れていた。エリーズはベッドの上で自分の両腕を抱くようにして肩を震わせた。

ノルマンディの田舎で育ったエリーズにとって雪は身近なものだった。櫓にスキーに何でもこなした。一方、アントワーヌは都会育ちで雪を知らない。

昨年の冬に一度だけ二人で一緒にスキー場に出かけたことがあったが、アントワーヌは足を骨折するのを恐れて一度も滑ろうとはしなかった。彼は、子どものようにはしゃいで何度も滑り降りするエリーズの姿をロッジの窓からじっと見ているのに飽きて、一人で何も言わずにホテルに帰ってしまった。

エリーズは彼の姿が見えなくなって焦った。よそ見をしてバランスを崩した彼女は派手に転倒した。しばらく気を失っていた彼女は、骨折はしていなかったので自力で歩いてホテルに戻った。

二人の間がぎくしゃくし始めたのはそれからだ。アントワーヌはエリーズに相談もせずに引っ越しを決めた。以来、エリーズは雪を見ることなどなくなっていた。

そんな彼女の目に、天から白く冷たい結晶がひらひらと舞い落ちるのが見えた。エリーズは叫び声を上げた。

「アントワーヌ！　お願いだから、その窓を閉めて。雪が部屋に入ってきてしまうわ！」

だが、そんな彼女の言葉に対してアントワーヌは当惑するような顔を見せた。

昨年の冬からエリーズは体調を崩してずっとベッドの上にあった。そんな彼女を元気づけようと、アントワーヌは努めて明るい笑顔で言った。

「君のためにシャーベットを手に入れてこよう。それでも食べて、元気を出してくれよ」

そう言うと、部屋から出ようとしないうちにエリーズに代わって、アントワーヌが外へ飛び出した。

「慌てて飛び出しちゃだめよ！」

アントワーヌの靴は冬用ではなかったので、凍った階段で転びはしないかとエリーズは心配したのだ。道路に飛び出したとたんに氷で滑って尻餅をつき、苦痛にうめくアントワーヌの姿を想像すると、エリーズは苦笑を隠せなかった。きっと翌日には足腰が立たなくなるんじゃないかしら？　そんなことを思いながらエリーズはアントワーヌの帰りを待っていた。

「ほら、初雪のように繊細な舌触りのシャーベットだよ。どうぞ召し上がれ！」

アントワーヌはその両手をお椀のような形にしてエリーズに差し出した。

「アントワーヌ！　あなた、いったいどうしたの？」

エリーズの視線は、アントワヌが差し出した両手とは違う所に向いていた。

「ああ、歩いている途中でだんだん暑くなってきたんでね、脱いでしまったんだ」

彼は上半身裸だった。

「とにかく服を着てよ、アントワヌ。目のやり場に困るわ」

アントワヌはしぶしぶエリーズの言葉に従った。しかし、彼が選んだのはやはり夏物の半袖のTシャツだった。

翌日、アントワヌは水着姿で外に飛び出した。エリーズが窓からそっと外を眺めると、他の人々も水着か下着だけの姿で凍った川の上で雪と戯れている。

こんな凍えるような寒さの中、あの人たちは平気なのかしら？ 見ているこっちが凍え死にしようよ。エリーズは肩にかけたカーディガンをかき抱いてベッドに戻った。ふとんを首までかぶってもエリーズの震えは止まらなかった。それは、寒さだけによるのではなかった。

あの人たちは感覚をなくしている。この寒さがわからなくなっているだけではない。アントワヌが火傷しているのにも気づかなかったように、痛みも感じなくなっているに違いない。

この町に初めて降った雪がみんなの感覚をおかしくしているに違いないとエリーズは思った。この町に、正常な感覚を持ち続けている人間が自分以外にいるのだろうか？ ひょっとして、自分だけが正常なのではないか？

いや、とエリーズは思いなおした。いまやあの人たちこそこの町では正常なのだ。部屋の中で震えながらふとんにくるまっている自分こそ異常な人間に思われているに違いない。

「違う、違う！」

エリーズは激しく首を振って、必死でそんな考えを否定した。

「エリーズ、君も一緒に外で遊ばないか？」

いつの間にかアントワヌが帰ってきていた。

「イヤッ！ こっちに来ないで……」

次々と枕を投げつけるエリーズに対してアントワヌは困惑した表情を見せた。

「エリーズ、君はいったいどうしたんだい？」

アントワヌがベッドに近づいていくと、エリーズは金切り声を上げてベッドから飛びのいた。必死に窓際へと逃れていく。

「エリーズ？」

アントワヌがさらに彼女に近づくと、エリーズはためらわずに窓からその下の乾いた硬い地

面にその身をひるがえした。

アントワヌが階段を駆け下りると、他の人々も次々とエリーズの遺体の周りに集まって来た。その中にはこの町の医師もいた。彼はアントワヌに近づいてきた。

「いつかこうなるのではないかと思っていたが……」

「昨日の朝もおかしかったんです。こんなに暖かいのにストーブを点けろとうるさくて。もちろん、点けませんよ。点けた振りをしただけです。それから、窓の外を眺めていると、みんなが楽しそうに川遊びしているのが見えたので、それを眺めているうちに、ついうっかりと手をストーブの上に置いてしまったんですが、それを見て妻は叫び出しましてね」

「彼女は幻覚を見たんだろうねえ。やはり、あの事故の後遺症は根深いものだったんだね」

「ええ、とても残念です。あのスキー事故以来、雪を見ると怯える彼女を連れて、一年中温暖なこの南の町に越してきたのに……」

「まあ、仕方がない。君はできるかぎりのことはしたんだよ。今回は不幸な事故ということで検死報告を書いておくよ」

アントワヌが医師と握手して別れると、この常夏のリゾート地にバカンスに来ていた人々は興味をなくしたように、一人またひとりとその場を去って行った。

エリーズの遺体のそばには、誰かが落としたシャーベットの氷が解けて、地面に黒い染みができていた。

(了)

それは、十二月の中旬のことだった。

ある山村で奇妙な事件が発生した。数人の児童が一夜にして姿を消したのだ。小学校は臨時休校となり、自宅でカンズメとなった子供たちは、それぞれの家で詰まらなそうな顔を並べていた。

時刻は午後の四時になろうとしている。太陽は山の裏に隠れてしまい、窓の外はどんよりと暗くなり始めていた。レイジュの家では、古民家特有の隙間風が、襖をカタカタとならし始める。

庭は昨晚の大雪ですっかりと埋もれていた。氷の上を滑ってきた冷気がレイジュの背中をくすぐる。弟たちは奥の部屋で漫画を読んでいる。

祖母はテレビのチャンネルをまわすと、こともなげにつぶやいた。

「昨晚は数十年ぶり的大雪じゃったが、今夜も同じぐらい降るようじゃな」

レイジュは不満だった。同級生が消えたのに、なぜ祖母は平然とミカンの皮を剥いているのだろうか。自分の孫以外は興味がないという薄情な人間ではないはずなのだが。

「最近の者は知らぬと思うが、神隠しなど昔は良くあったことじゃ」

祖母はチャンネルを回し続けていた。あるテレビ局で古い芸人が飽きもせず下らないトークを繰り広げていた。祖母はため息をつく、テレビを消した。窓に何かが当たる音がする。もう雪が降り始めたようだ。この雪は一晩中続く見込みだ。

「いまのうちに身体を温めておき。ほれ、こたつにもっと深く入らないと」

祖母は鮎色の戸棚から湯飲みを出すと、新しいお茶を注いだ。力強い湯気がまっすぐに立ち上がる。かと思えば、隙間風にさらわれて消えていく。

祖母はリウマチに膝を侵されて以来、すっかりと外出を控えるようになった。

レイジュは両親が戻ってくるまですることもなく、淹れたてのお茶を一口すする。薄緑色の液体が、じんわりと全身を温める。

祖母はことさらに膝をさすった。山を越えた太陽は急速に翳り、夜の帳が深くなる。レイジュは行方不明の友人たちのことを思うと、大きなため息をついた。それを祖母は何かの合図と捉えたようだ。

「まあ、つまらぬ話だが……」

祖母が”つまらぬ話”と前置きするときは、重要で、しかも話が長くなるときだ。このタイミングで切り出すということは、神隠しについて何か知っているということだ。レイジュは居住まいを正した。それが、話を聞くときの祖母に対する礼儀だった。

背筋を伸ばした孫を見て、祖母は満足そうに頷いた。皺だらけの祖母の口が開いた。

いまから約四百年前の話だ。

徳川家が豊臣家を滅ぼそうとして起った大阪冬の陣は、天下無敵の大阪城に立てこもる豊臣秀頼を攻めあぐねた家康が、偽りの和睦をすることで一旦は収まった。しかし、不穏な空気が全国を包み続けていた。

恐怖と混乱が支配する大阪で、大勢のひとが城を去った。その中に、故太閤秀吉の妻である近江殿もいた。彼女は近江出身だったためそう呼ばれていたが、子をなさなかったこともあり、女中からも忘れ去られるような寂しい立場だった。彼女は身分が低いために側室もなれず、女御としてひっそりと大奥につめていた。

当時はだれもが徳川家を恐れていた。側室たちの実家も家康を憚り、また権勢を誇る淀殿への反感もあり、ほぼ全員が実家に戻っていた。主人も死んだことであり、当時はそれが普通のことだった。ところが、近江殿は実家どころか親族まで戦乱で死に絶え、戻るべき場所がなかった。

秀頼の乳母の子であり、秀頼の唯一の幼馴染かつ豊臣家の重臣だった木村重成長戸守が哀れんで、近江殿は木村家の親族に引き取られることになった。重成の実家は近江殿と同じく近江にある。重成はとても優しい男だった。なお、重成は大阪夏の陣で徳川の大軍に突撃して壮絶な討ち死にをしている。

「戻る家があるのかい」

近江殿がお暇の挨拶を淀殿にしたとき、彼女は嫌味をたっぷりと込めて言った。淀殿は城内に徳川方の間者が満ちていると疑っており、実際その通りなのだが、この近江殿に対してもそのような見方をしていた。

「親戚の家に引き取られることになりました」

「その親戚とは駿府方面かのう」

家康は將軍職を秀忠に譲ったあとは、駿府に住んでいる。この言葉の意味するところは近江殿にも理解できた。淀殿の横槍を恐れた重成から内密にと言われていたので、近江殿が口をつぐむと、ふん、と淀殿は鼻を鳴らして女官に命じた。

「行列だけは豪華にしておやり」

よく考えると、淀殿にしても秀頼を産んだだけで無官の女性にすぎない。それなのに大阪城の主として振舞うのは、どこか奇妙なことのようにな江殿には思えた。

ほどなくして、行列は大阪城を出発した。豪華絢爛だが、見る者はみな「葬列のようだ」と評した。楽しそうな気分はどこにもなく、死地に向かう悲壮感が漂っていた。

陰湿な雰囲気飲み込まれたのか、行列は最初から難渋した。大阪を一步出れば、全て徳川家の世の中なのだ。豊臣家の縁者が領国を通過するのを快く思うわけがなく、領国を通るためになけなしのお金を賄賂として使ったり、「その人数は不審である」という理由で供のものが大阪に帰らされたりして、近江の手前に着いたときには、着の身着のままの状態となっていた。供の人間も、淀殿の意向を知っただけに、無理して付いていく律義者はひとりもいなかった。

季節は真冬である。女性の一人旅は厳しすぎた。さらに条件の悪いことに、数十年ぶりとなる大雪が降り始めた。あでやかな着物を着た女性が、ひとり、木の杖を頼りにして峠の頂をめざす。豊臣家の栄華が過去にものになったとはいえ、秀吉に愛された女性がこのような目に会うとは、実に哀れなものだった。

木村重成は近江殿の旅路を心配して、親族が峠まで出迎えるよう手配をしていた。ところが、当日はまたぎも出歩かないような大雪で、重成の親族もまさか近江殿がこの雪の中を一人で歩い

ているとは思ってもせず、天候が回復するのを待つことにした。翌日になり、そこで彼らが見たものは、幼き子供と、その子を探すようにして倒れている近江殿の死体だった。

重成の親族も、行き倒れた子供をいぶかしんだ。村人たちが首を捻り続けていると、ある豊臣浪人がつぶやいた。

「これは、秀頼公のご子息であられる国松様ではないのか」

「バカなことを口にするでない。そのような高貴なお方がこの寒村にこられるわけがない」

「これは大きな声ではいえぬが、重成様はもう豊臣家は滅亡するとお考えになっている。そのため、落城が免れないと分かったときには、子供を身ごもっている妻をよろしくたのむとの言伝があった。だから、この子供も、もしかしたら……」

「淀殿が国松を手放すわけがないではないか」

「秀頼公と重成様は幼き頃からの友である。秀頼公が密かに国松様のことを頼むとしたら重成様をおいてほかにはござらぬ」

沈黙が辺りを包み、村民の目は二人の死体に注がれた。

「しかし、このことが大阪方や駿府殿に知られたら……」

「こうなったからには、だれにも知られないようにするほかあるまい」

二人は丁重に葬られ、峠には名前のない墓標が建てられた。暫くは花を手向けるものも多かったが、いつしか足が遠のくと共に木碑は朽ち果て、言い伝えだけが村に残った。

それから、この村には奇妙な出来事が起こるようになった。

近江殿が命を落としたときのような豪雪の日に、国松様と背格好が似た子供が神隠しに会うのだ。消えた子供たちは数日後に、何事もなかったかのように自宅に戻る。村人たちは、近江殿が雪女になって国松様を探しているのだと噂をしあった。

いくら供養しても、この神隠しは終わらなかった。それだけ、国松様を守りきれなかった近江殿の無念は深かったのだろう。

「そのとき、国松様は何歳だったの？」

祖母は手にしていた湯飲みをコタツの上に置いた。風が無いのに、湯気が激しく揺れる。

「レイジュと同じく八歳」

ひときわ強い隙間風が吹いた。その風がレイジュの体をぐるりと巻いたと思うと、レイジュの姿は消えていた。湯飲みから上がる湯気は、もう揺れない。

さてと……祖母は腰を上げた。痛めた膝が悲鳴を上げる。

そろそろあの峠に行って、子供たちを取り戻さないといけない。この役目は靈感の鋭い女性たちが担ってきたが、いよいよ、この伝統も自分の代で途絶えてしまいそうだ。科学技術が発達した現代で、不可思議な力を信じろというほうがムリなのだ。

「なあ近江殿、もういいじゃろ」

聞く人もなく祖母はつぶやくと、大雪の日が減ることを願いながら、果てしなく続く雪景色の中を歩く準備を始めた。

(了)

なかなか泣き止まないあなたに、一つ昔話をいたしましょう。

その女性に会ったのは、まだ私が子供の頃のことでした。その日も今日と同じように、足首が隠れるほどの雪が積もってありました。

私の母は、生まれつき体が弱い人でした。風邪をこじらせて寝込むのも、珍しいことではありません。ですから私は、その日もいつもと同じように、単に風邪をこじらせただけで数日もすれば回復するもの、と思っておりました。

ところが、母の容態は深刻なものだったのです。お昼頃にいらしたお医者様は、ずっと母に付きっ切りでした。父は慌てた様子で、あちらこちらに連絡を取っていました。夕方には、近場の親戚が家に集まってきました。私は邪魔になるからと、母の部屋に近付くことを許されませんでした。

しかし、私は少しお転婆なところがありましたので、何とかして母の部屋に近付こうと試みたのです。最終的に行き着いた先は、軒下でした。

当然のことながら、軒下では母の顔も見えません。でも板の間に小さな穴が開いていて、人の声をわずかばかり聞き取ることができたのです。お医者様は「峠だ」と仰いました。私は知恵が無かったものですから、なぜ山の話をしているのだろう、と首を傾げたのでした。

それから、私は誰かの足音を聞きながら、軒下で震えておりました。手足の先が、痛くてしかたがありません。それでも、しばらくは我慢をしておりましたが、ついに耐えかねて家の中に戻ることにしました。

軒下を這っている途中で、私は見慣れない物を目にしました。近付いて拾ってみると、さらりとした薄い布でした。しかし薄暗がりでは、色がよく分かりません。私は外へ這い出ると、さっそく布を広げてみました。

その布は、向こう側に立っている木が透けて見えるほど薄いものでした。白とも水色ともつかぬ綺麗な色合いで、光沢がありました。風が吹くと、光沢が白波のようにうごめきます。

薄い布をすっかり気に入ってしまった私は、懐に入れて家の中に入りました。私を見つけた叔母は「良かった」と声を漏らしました。私がいなくなって心配していたようですが、気を遣ってか私を怒ることはしませんでした。

夕飯を食べ、風呂に入れられた私は、いつもより早い時間に父に寝かしつけられました。ところが、なかなか寝付くことができません。父が部屋を出ていってから、私は何度も寝返りをうちました。水を飲みに行っても、布団に入るとすぐに喉の乾きを覚えました。水を飲めば、厠《かわや》も近くなります。布団を出入りしているうちに体はすっかり冷えてしまい、ますます眠れなくなるのでした。

眠れないまま長い時間を過ごした私は、ついに寝るのを諦めました。上着をはおって廊下に出ると、一つだけ灯りがついた部屋がありました。母が寝ている部屋の隣りでした。きっと親戚が、代わる代わる母の様子を見ていたのでしょう。私は何だか怖くなってしまって、外に逃げよう

と玄関に向かったのです。

ところが玄関には、一人の見慣れない女性が立っていました。彼女は白い着物に、青い帯を巻いていました。真っ黒い御髪《おぐし》に、雪に溶けてしまいそうな白い肌。目の辺りは忘れてしまいましたが、唇には真っ赤な紅を差して、それは綺麗な方でした。私は、母の知り合いにこんなに素敵な人がいたのか、と驚いたのです。

私は人を呼びに行こうとしましたが、女性に呼び止められてしまいました。

「私は、あなたにお会いするために参ったのです」

私は首を傾げました。彼女に会うのは初めてのことです。

「それは、どういったことでしょうか？」

「あなたは軒下で、薄い布を拾われたでしょう？ あれは、私のものなのです。とても大切なものなので、返していただけないでしょうか？」

私は悩みました。眉を寄せた女性は、本当にお困りのようでした。しかし私としても、綺麗な布をただお返しするのは、何やら惜しいような気がしたのです。

「布はお返しいたします。その代わりに、一つお願いを聞いていただけないでしょうか？」

女性は安心したように、ほほ笑みを浮かべました。子供の言うことだから易いものだろう、と思ったのかもしれませんが。

「私にできる事でしたら、何なりと」

「私は、眠れなくて困っております。朝になるまで、私の相手をしていただけないでしょうか？」

女性は、一つ頷きました。

「あなたもお困りなのですね。分かりました。明け方には、ここを発たねばなりませんので、それまでご一緒いたしましょう。うるさくしてもいけませんので、お外に出しましょうか」

私は部屋に薄い布を取りに行ったら、女性と一緒に庭に出ました。空は厚い雲で覆われているようで、星一つありません。それでも女性の周りだけが、輝いているようでした。

私と女性は、雪ウサギを作ったり、雪玉を投げて遊びました。女性は寒さにとても強いようで、白い着物一枚のみでも震えることはありませんでした。更に彼女は、素手でも平気で雪を扱っていたのです。

私が寒さに根を上げると、女性はそっと抱き寄せてくれました。柔らかなぬくもりが私を包んで、優しい心持ちにさせました。

だからでしょうか。朝日が昇ろうかという時に、私は素直に女性に薄い布をお返しいたしました。惜しい気持ちも心の片隅にありましたが、容易に抑えることができたのです。

女性はお返しした布を、頭の上に被りました。深く被ったので、顔の半分が見えなくなってしまいました。それから懷に手を入れて、掌ほどの紙片を取り出しました。更にその場にしゃがみ込むと、雪をすくって紙片に包んだのです。彼女は立ち上がると、私に小さな包みを差し出しました。

「先ほどは、私の方が楽しませていただきましたので。布をお返しいただいたお礼です。これを、お母様に飲ませてさしあげて。あまり強く握ると溶けてしまいますから、そっとお持ちになってくださいね」

私は包みを受け取ると、掌の上に乘せて観察しました。紙片には、梅とウグイスが描かれていました。

私が包みから目を上げた時には、女性の後ろに従者と思しき人々が並んでいました。みんな笠を被っていて、顔を見ることはできません。朱塗りの傘を持った者や、柄の長い錫杖を持った者。巻物を持った者など、十数人はいたでしょうか。彼等はみんな、白い装束を身につけているのでした。

「これから、どちらに行かれるのですか？」

私が尋ねると、女性は小首を傾げて笑いました。口元を隠した手の奥に、赤い紅が見えました。

「ここから、もう少し北へ行ったところでしょうか。私はそこへ、春を告げに行くのです」

その時、東の空が明るくなりました。雲が薄れて、日が昇り始めたのです。一方で、厚い雲で覆われた北の空からは、細かい雪が舞い降りてきました。

「姫様。そろそろ、お時間でございます」

女性は、近付いた一人の従者に頷きました。

「それでは、私は参ります。ご縁がありましたら、またお会いいたしましょう」

女性と従者達は、私に深々と頭を下げると、列をなして歩き始めました。日の光を弾いて輝く雪が降り注ぐ中を、一行はゆっくりと北に進んでいきました。それは今思い出しても、この世のものとは思えぬ情景でした。子供の私ですら、一声も出せぬまま見送っておりました。一行が見えなくなっても、シャラン、シャランという錫杖の音が、しばらく辺りに響いていました。

錫杖の音がしなくなってから、私は包みを持って母の部屋に近付きました。不思議なことに、部屋の近くには誰の姿も無く、物音一つしませんでした。軒下で寒さを我慢していたのが嘘のように、私は簡単に母が寝ている部屋に入ることができたのです。

母の顔は青白く、疲れ果てているようでした。私は母の口をこじ開けると、包み紙の中の雪を流し込みました。

驚いたことに、母の顔は見る見る血の気を取り戻していきました。そうして目を覚ますと、ゆっくりと起き上がりました。私は嬉しくて、涙を流しました。今のあなたのように、なかなか泣き止まない私の頭を、母は撫で続けてくれたのでした。

あなたが手にしている紙片も、梅とウグイスが描かれているのですね。私は二度も、あの方に助けられたのでしょう。

さあ、泣き止んで、外を御覧なさい。東の空の明るいこと。これから、暖かくなりますね。

(了)

光の雪が降る六本木のバー、ホワイトタウンで、白木稔は学生時代の仲間と忘年会をしていた。

「白木い！ まじで夢を追いかけてっかあ？」

丹下は既に呂律が回っていない。

「もう貯金も無いしさ、無職で実家暮らしってのもいい加減きついぜ」

「でもお、絵え、描いてんだろお？」

稔は画家を目指して二年前に杉田情報研究所を辞めた。当初は絵を描きまくるのだと意気込んでいたが、コンテストに一度落ちたきり、一枚も仕上げていなかった。

「時給を考えると効率悪くてバイトする気にもならんしさ。俺、就職しよっかな」

散々飲んで、酔い潰れた丹下を送って行った。赤ん坊を抱いた綺麗な奥さんが随分恐縮していた。実家とは反対方向だったので、帰宅は終電になった。電車の中で別れた恋人の夢を見た。

正月も明けて二週間が経った週末、丹下から電話があった。

「うちの知財部で働かないか。技術が分かる奴が欲しいんだよ。ザクスは給料いいぜ」

電話を切り、イーゼルに掛けたままの、雪の街の絵をぼんやりと見た。稔は自分の中に、画家を目指す気持ちを探した。

「やい！ 飢え死にさせる気か！」

祖父のどなり声が聞こえた。はいはいと答える祖母の声もする。食事の時間を過ぎていることに気がつき、稔はリビングに下りた。

「仕事から帰って来たばかりなのよ！」

母親はいら立っていた。祖父は稔を見て何かぶつぶつと呟いた。

「稔は……………やい！ 早く飯だ！」

「じいさん、あんまどなると心臓に悪いよ。買い物あるし、俺、外で食って来るわ」

稔は夕食を断り、着替えをして外に出た。

駅前で食事をしてから本屋に向かった。息が白い。年が明けてから寒い日が続いている。

「稔くん？ ねえ、稔くんでしょ！」

知的財産関連の本棚の前で、後ろから声を掛けられた。小柄な女性が笑顔で立っていた。それは二年前に別れた、かな恵だった。

「おう、久しぶり。元気だったか？」

稔は動揺を隠して言った。心臓が突然、存在感を増して脈打った。あの時、収入が無くなることを理由に稔から別れを切り出した。けれど最近は、毎晩かな恵のことを思い出すようになっていた。

「ねえ、ちょっとお話ししない？」

嬉しそうに、かな恵が言った。まっすぐで、屈託がなく、気配りもできる。可愛いし、当然、

結婚していると思っていた。薬指に指輪がないのを横目で確かめる自分を、稔は滑稽だと思った。二人は連れ立って本屋を出た。

「あれ？　ねえ、雪だ！」

掌を上に向けて言う。稔もかな恵の視線を追って夜空を見上げた。闇の中から湧き出すように、白い点が落ちて来る。

「ねえねえ、高い所に行こうよ！」

かな恵がはしゃぐので、スタバでカフェオレをテイクアウトして、幹線道路を渡る高架橋に行くことにした。

かな恵が隣を歩いていることが嬉しく、不思議だった。人生が良い方向に動こうとしているのかもしれない。かな恵の小さな歩幅に合わせて、ゆっくり歩いた。

高架橋には他にもちらほらと見物人がいた。二人は巨大なコンクリートの橋の真ん中で立ち止まり、カフェオレを飲んだ。

「あったかーい！　おいしい！　ね？」

雪が降っているから、寒いから、二人の距離は自然と近くなる。

「雪の日は街が静かね」

「雪は音を吸収するからな」

暫くの間、二人は黙って雪の街を見下ろしていた。顔の表面に冷たい点が出来ては消えていく。稔は雪の舞う闇に、裸のかな恵を幻視した。手を伸ばして頬に触れてくる。ベッドの中で、かな恵はよく稔の頬を触った。冷え性の指先はいつも冷たかった。

「絵、描いてる？」

「まあ、なかなかうまくいなくてさ」

「もう二年も経ったんだね。あつという間だったな」

かな恵の白い息が宙を舞い、雪と混じり合って消えた。

「俺は、結構長く感じたよ」

「ふうん、わたしは変わってないよ」

池袋の駅前で別れた後、稔は丹下にメールした。

翌週の火曜日に、丹下から書類審査通過を知らせるメールが来た。水曜日に面接ということだった。稔はイーゼルと油絵具をクローゼットにしまい、換わりにスーツを取り出した。

黒いガラスの壁面を雲が移動して行く。稔はネクタイの結び目を確認し、大手電気企業ザクスの正面ホールに入った。体育館のような巨大な空間で、奥には受付嬢がずらりと座っていた。

受付を済ませ、階数別に分かれたエレベータの十五階行きを選んで乗った。扉が閉まる直前、男が二人、飛び込んできた。

「あ？　杉田研かよ」

赤いブルズンを着た年配の男が、何かの書類を見ながら言った。

「丹下は優秀な人材だと言ってましたよ」

「杉田んとこじゃ、ろくなもんじゃねえよ」

その二人も十五階で降りた。

耳の奥で甲高い音が鳴り始めた。もつれそうな足をなんとか動かして、稔は待合室だと指定された会議室に入った。

約束の時間を三十分過ぎて別の会議室に呼ばれた。一直線に並んだ机に、さっきエレベータで会った二人と丹下が座っていた。

「こんにちは、知的財産部部長の寒川です」

赤いブルゾンの男が名乗った。寒川と目が合うたび、背中を氷が伝い下りた。

「白木さんは杉田情報研究所出身だって？ 杉田くんはザクス時代から知っていてね。ははは、いやあなかなか優秀な男ではあったよ」

寒川は無表情のまま、口元だけで笑った。

「丁寧にご指導頂き、勉強させて貰いました」

「勉強ねえ、もう二年も前でしょ？ 技術は日々進歩してるよ？」

稔は時間いっぱい、言葉を尽くして自分をアピールした。

「すまん、うちの部長は杉田さんが嫌いらしい。俺が把握しておくべきだった」

三日後、稔は一人、ホワイトタウンのカウンターで丹下からのメールを読み直していた。結果は不合格だった。

「テキーラ、ダブルで下さい」

何杯目か分からない注文。さらにもう一杯と思った時、スマホが震えた。

「あんた今、どこにいるの？ すぐ帰ってらっしゃい！」

祖父の死を知らせる母親からの電話だった。

外は大雪で、かなり積もっていた。店を出た稔は池袋に戻り、ふらつきながら、かな恵と行った高架橋に向かった。吹雪の中、遥か下の道路を見つめた。車がぎっしり詰まっていた。

夢も社会も街も雪も、何もかもが稔を責めていた。

握り締めていたはずのスマホが雪の上に落ちた。吹雪の音に包まれながら、稔は誘惑に身を任せようとしていた。

その時、風が止んだ。街から音が消え、世界が無音になった。止まった時の中に、稔は一人取り残された。そして向こう側から、しわがれた声が滲み出して来た。

『稔は……今日は元気がないな』

祖父がぼそりと言った言葉。あの時は聞き取れなかったのに、今になって聞こえた。

「おじいちゃん……う……」

涙が溢れた。

『稔なら大丈夫だ』

『好きにやりゃあいい』

小さい頃、祖父が掛けてくれた言葉が幾つも蘇った。

低い振動音で我に返った。慌てて、半分宙に乗り出していた上半身を引っ込め、スマホを拾い上げて電話に出た。

「稔くん、また雪だよ！　ねえ、高架橋でカフェオレ飲もうよ！」

膝から力が抜けて、雪に両手をついた。吹雪にまぎれて、大声で泣いた。

「稔くん？　どうしたの？　ねえ、ちょっと」

かな恵は稔が応えるまで、語りかけるのを止めなかった。

祖父の葬式で、稔は棺に向かって頭を下げ、「ありがとうございました」と声に出して言った。祖母がそばに来て礼を言って笑った。

稔は実家を出て木造アパートで独り暮らしを始めた。隙間風が寒いけど、問題はない。祖父も若い頃、安アパートに住んでいたらしい。

「いらっしやいませ！」

満面の笑顔で振り向いた稔の頬に冷たい指が触れた。

「頑張ってるね！　恰好いいよ！」

かな恵はちよくちよく、バイト先の居酒屋に遊びに来てくれる。

「冷やかしに来たなら帰れよ」

「なによ！　お客さんだよ！」

二人は、またつき合い出していた。

「雪の街の絵は描けた？」

「昨日、コンテストに送った」

絵には夜の闇に浮く裸のかな恵を付け足したのだけど、まだ言っていない。

かな恵はもう一度手を伸ばして、稔の頬を触った。冷たい指先は雪のように優しかった。

（了）